

長万部町

豊野 6 遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 11 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

長万部町

豊野 6 遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 11 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



豊野6 近隣周辺の空中写真（1976年10月9日撮影）（この写真は、国土地理院発行のものを複製したものである）

例 言

1. 本書は財団法人北海道埋蔵文化財センターが、平成11年度に実施した北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴う長万部町豊野6遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本書の執筆は録田 望、立田 理、花岡正光、編集は録田 望が行った。

整理作業の担当者は下記の通りである。

土器 録田 望

石器・写真 立田 理

火山灰分析 花岡正光

文責者は文末に記した。

3. 遺物・記録類は整理及び報告書作成後、長万部町教育委員会が保管する。

4. 調査に当たっては下記の諸機関、各氏から御指導、協力をいただいた。（順不同・敬称略）

長万部町教育委員会 佐藤 登・山田明美・水野一夫・大根田雅美

今金町教育委員会 寺崎康史

八雲町教育委員会 三浦孝一・柴田信一

七飯町教育委員会 石本省三・山田 央

木古内町教育委員会 菅野文二・三上英則・大矢内愛史・木元 豊・駒田 透

森田村教育委員会 佐野忠史

北海道文化財保護協会 竹田輝雄・大島秀俊・谷岡康孝・長谷川徹

北海道教育委員会 大沼忠春・田才雅彦

記号等の説明

1. 遺構の表記は、下記の記号を用いた。

P：土壌

F：焼土

2. 遺構図の方位は真北を示す。

遺構図の縮尺は、スケール等が入っているもの以外は、原則として40分の1である。

遺構平面図の+はグリッドライン交点で、交点傍らの名称記号は右下の区画を示している。

遺構平面図の・小数字とセクションレベルは標高(単位m)である。

3. 遺構平面図の出土遺物は記載のない限り、下記の記号を用いている。

●：土器

■：礫石器

×：フレイクチップ

▲：剥片石器

□：礫

★：その他

4. 遺構の規模は「長軸の上端/下端×短軸の上端/下端×確認面からの最大深・最大厚」で示してある。

一部破壊されているものは現存長を()で示し、不明のものは—で示した。

5. 土層名は、下記の記号を用いた場合がある。

白頭山—苫小牧火山灰：B—Tm

駒ヶ岳—d火山灰：K o—d

駒ヶ岳—g火山灰：K o—g

火山灰の略号は、北海道火山灰命名委員会(1982)『北海道の火山灰』による。

6. 土層の色調は『新版標準土色帳』(小山・竹原 1967)に従って記載した。

7. 遺物実測図と土器拓影図の縮尺は、スケール等が入っているもの以外は、原則として以下のとおりである。

復元土器：3分の1

土器拓影：3分の1

剥片石器・石斧：2分の1

石斧を除く礫石器：3分の1

土製品・石製品：2分の1

8. 石器・土製品・石製品の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。

剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。破損しているものについては、その数値を()で括ってある。なお、遺物実測図中でたつき痕はV—V、すり痕は—|—で範囲を表した。

目 次

口絵	
例言	
記号等の説明	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	
I 調査の概要	1
1 調査要項.....	1
2 調査体制.....	1
3 調査にいたる経緯.....	2
4 調査の方法.....	2
5 土層の区分.....	4
6 遺物の分類.....	9
7 調査結果の概要.....	12
II 遺跡の概要	13
1 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	13
2 遺跡周辺の地形.....	17
III 遺構	19
1 概要.....	19
2 土壌.....	20
3 焼土.....	20
IV 包含層出土の遺物	23
1 概要.....	23
2 土器等.....	23
3 石器等.....	29
V 自然科学的分析	49
1 豊野6遺跡の火山灰について.....	49
写真図版.....	51
引用・参考文献.....	71
報告書抄録	

挿 図 目 次

I 調査の概要

図1 豊野6遺跡位置図	1
図2 調査区の設定	2
図3 周辺の地形と調査区	3
図4 土層柱状図	4
図5 メインセクション1 (1)	5
図6 メインセクション1 (2)	6
図7 メインセクション1 (3)	7
図8 メインセクション2	8

II 遺跡の概要

図9 遺跡の位置と周辺の遺跡	15
図10 遺跡周辺の旧地形	18

III 遺構

図11 遺構位置図	19
図12 P-1	20
図13 F-1~6	21
図14 焼土出土の遺物	22

IV 包含層出土の遺物

図15 包含層出土土器分布図 (1)	24
図16 包含層出土土器分布図 (2)	25
図17 包含層出土の土器 (1)	26
図18 包含層出土の土器 (2)	27
図19 包含層出土土器分布図 (1)	32
図20 包含層出土土器分布図 (2)	33
図21 包含層出土土器分布図 (3)	34
図22 包含層出土の石器 (1)	35
図23 包含層出土の石器 (2)	36
図24 包含層出土の石器 (3)	37
図25 包含層出土の石器 (4)	38
図26 包含層出土の石器 (5)	39
図27 包含層出土の石器 (6)	40
図28 包含層出土の石器 (7)	41
図29 包含層出土の石器 (8)	42
図30 包含層出土の石器 (9)	43
図31 包含層出土の石器 (10)	44
図32 包含層出土の石器 (11)	45

V 自然科学的分析

図33 試料採取位置	50
------------	----

表 目 次

I 調査の概要

表1 遺構数一覧	12
表2 出土遺物一覧	12

II 遺跡の概要

表3 長万部町の遺跡一覧	16
--------------	----

III 遺構

表4 検出遺構一覧	19
表5 検出層位別遺構一覧	19
表6 遺構出土掲載土器一覧	22
表7 遺構出土掲載石器一覧	22

IV 包含層出土の遺物

表8 包含層出土土器等層位別出土点数一覧	23
表9 包含層出土掲載土器等一覧	28
表10 包含層出土石器等層位別出土点数一覧	29
表11 包含層出土掲載石器一覧(1)	47
表12 包含層出土掲載石器一覧(2)	48

V 自然科学的分析

表13 火山灰の鉱物組成	50
--------------	----

写真図版目次

写 真

I 遺跡の概要

2 遺跡周辺の旧地形

写真1 遺跡付近の航空写真	17
---------------	----

V 自然科学的分析

1 豊野6遺跡の火山灰について

写真2 火山灰の顕微鏡写真	51
---------------	----

写 真 図 版

写真図版1 豊野6遺跡遠景・調査前の状況	51
写真図版2 調査終了後の状況・25%調査状況	52
写真図版3 メインセクション1	53
写真図版4 メインセクション2	54
写真図版5 包含層調査状況	55
写真図版6 遺構(1)	56
写真図版7 遺構(2)	57
写真図版8 包含層遺物出土状況	58
写真図版9 遺構出土の土器・包含層出土の土器(1)	59
写真図版10 包含層出土の土器(2)	60
写真図版11 包含層出土の土器(3)	61
写真図版12 頸焼成粘土塊・包含層出土の石器(1)	62
写真図版13 包含層出土の石器(2)	63
写真図版14 包含層出土の石器(3)	64
写真図版15 包含層出土の石器(4)	65
写真図版16 包含層出土の石器(5)	66
写真図版17 包含層出土の石器(6)	67
写真図版18 包含層出土の石器(7)	68
写真図版19 包含層出土の石器(8)	69

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

受託期間：平成11年4月1日～平成12年3月31日

発掘期間：平成11年7月12日～平成11年10月27日

調査遺跡：豊野6遺跡（北海道教育委員会登録番号 B-17-40）

所在地：北海道山越郡長万部町字豊野127

調査面積：2,600m²

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長 大澤 満

専務理事 佐藤哲人（5月31日退任）

宮崎 勝（6月1日就任）

常務理事 木村尚俊

総務部長 中田 仁

第1調査部長 畑 宏明（8月15日退任）

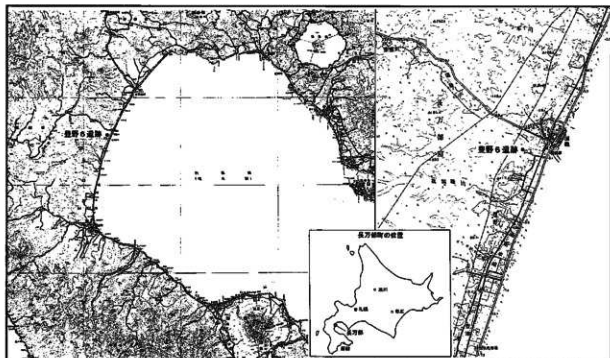
木村尚俊（8月16日兼任）

第1調査部4調査課

課長 遠藤香澄（発掘担当者）

主任 鎌田 望（発掘担当者）

文化財保護主事 立田 理



（この図は国土院地籍部発行の地籍図、1:25,000（縮尺：28-14-21、平成5年2月1日発行）、1:25,000（縮尺：28-14-21-18、平成4年2月1日発行）を使用して作成したものである。）

図1 豊野6遺跡位置図

3 調査にいたる経緯

北海道縦貫自動車道函館名寄線（函館～名寄）は現在、長万部および旭川鷹栖インターチェンジ間で供用されており、七飯～長万部間で工事が進められている。この事業に関する埋蔵文化財包蔵地については平成2年4月に日本道路公団札幌支社から事前協議がなされ、協議を受けた北海道教育委員会は平成2年4月に所在確認調査を、平成7年5月以降範囲確認調査を実施している。この結果、工事計画変更が不可能なことから発掘調査を必要とする遺跡は、日本道路公団長万部工事事務所管内（八雲町字立岩から長万部町字富野間の33.3km）の長万部町内で8ヵ所、隣接する八雲町では5ヵ所となった。七飯～長万部間の発掘調査は平成10年度から開始され、当センターが富野3遺跡、文化財保護協会がオバルベツ2遺跡、富野5遺跡の調査を行なった。平成11年度は当センターが花園2遺跡、花園3遺跡、豊野6遺跡、北海道文化財保護協会および長万部町教育委員会がオバルベツ2遺跡の調査を行った。豊野6遺跡は平成2年4月の所在確認調査により発見され、平成7年5月と平成9年10月・11月に範囲確認調査が行われ、発掘調査の必要な範囲は2,600㎡となった。

4 調査の方法

(1) 発掘区の設定

基本図には日本道路公団北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）工事予定図1,000分の1図面を使用した。工事予定中央線のS.T.A.909とS.T.A.910を通る線を基軸のMラインとして4m方眼を設定した。この方眼は南西端交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称し（例：S.T.A.910はM-10）、さらに必要に応じて2m方眼に4分割し小発掘区とした。小発掘区は南西端から反時計回りにa、b、c、dと呼ぶ（例：M-10-a）。

平面直角座標系第XI系中の各座標値は以下の通り。

S.T.A.909		X = -174,246.86301	Y = 5,286.46500
S.T.A.910	（調査区杭名 M-10）	X = -174,152.34214	Y = 5,319.08272
S.T.A.910+60	（調査区杭名 M-25）	X = -174,096.41274	Y = 5,340.80041

(2) 調査の方法

調査区の現況は、畑として利用されたのち植林された山林である。25%調査により耕作土であるI層中に遺物を多く含んでいることが判明したため、重機による抜根・耕作土の除去は行わず、I～IV層の各層を発掘区ごとに遺物の多寡に応じてスコップ、ジョレン、移植ゴテを用いて手掘り作業により掘り下げた。また、25%調査によりI層中から旧石器時代のものに類似する石核が出土したため、J-10区、K-N-5～10区については旧石器調査を実施し、J-10区、K-9・10区はV層を50cmほど掘り下げた。包含層の遺物については、必要に応じて記録し、小発掘区ごとに取り上げた。遺物の遺物は出土位置・標高・層位を記録した。野外作業と並行して現地でも水洗・分類・注記作業を行った。冬期は室内で整理作業を行い報告書の作成に当たった。（録田 望）

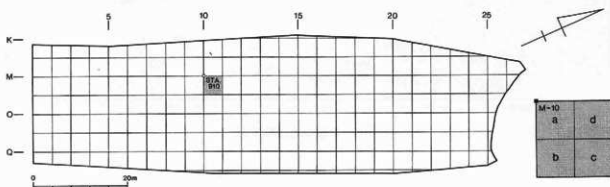
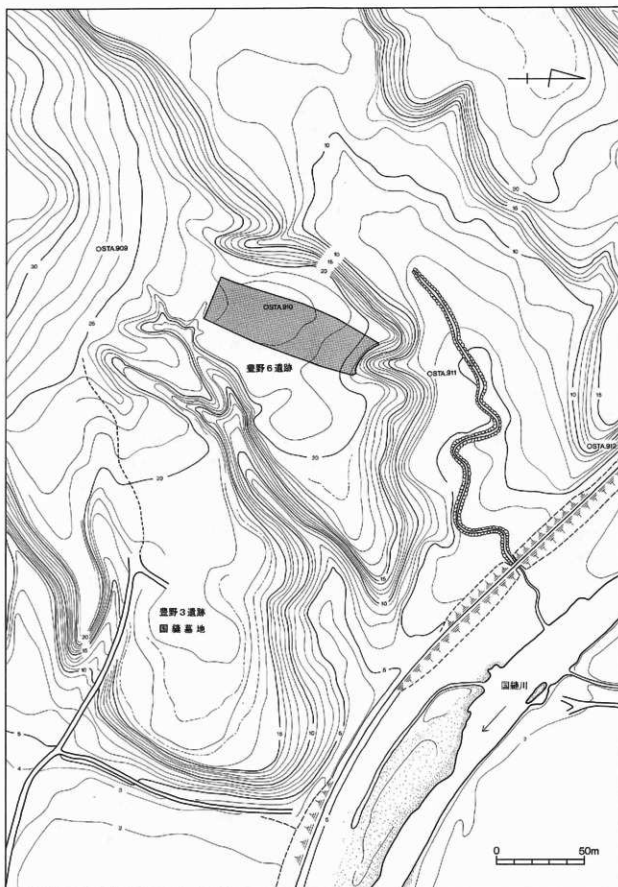


図2 調査区の設定



(この図は日本道路公団計画建設課第五工務事務所内の「北相模郡野島町(七敷～美万町)東方郡南地区延長美濃線形地図」縮尺1:1,000、図面番号1/10を転写して作成したものである。)

図3 周辺の地形と調査区

I 調査の概要

5 土層の区分

豊野6遺跡の土層断面図を図5～8に掲載した。調査区は北東に向かって緩やかに傾斜しており、調査区内で堆積状態が変化している可能性があった。そのため調査区を縦横するようにMライン、13ラインにセクションベルトを残してそれぞれ南東壁・南西壁の土層断面を観察し、記録した。

その結果得られた図4にしたがって、基本層序を述べ、その広がり、堆積状態などについて個々に説明する。なお、調査区内には風倒木痕、耕作、また植林された杉の根による攪乱が多くあり、上記の基本土層の残存状態は良好ではない。

I層 I層は調査区全域に分布し、近現代の遺物を包含している層である。調査区の現況は植林による杉林であるが、畑の畔とみられる畝が部分的に残存している。このことから植林以前は畑であり、I層はその時期に形成されたものとみられる。

II層 II層は調査区内の自然のくぼみ、風倒木痕中など極く部分的に残存するもので、残りのよい部分では下位から灰白色火山灰(ko-d)が検出される。なお、火山灰の噴出年代は1640年であることから、シャクシャインの乱の時期の遺構、遺物があることが予想されたが、いずれも検出できなかった。

I'層 II'層は近隣の調査で検出されている褐色風成層(佐藤ほか1999)に相当するものと推測される。

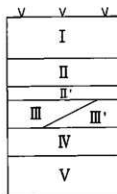
III層 III層は調査区全域に分布するが、風倒木痕の比較的少ない調査区北東部では層厚約20cm程堆積している。

III'層 III層の下位にみられるやや淡い灰黄褐色の色調を呈する層位をIII'層として区別した。この層はM-8ライン以北に顕著である。しかしこの違いは断面のみに観察され、遺物を取り上げる段階では両者ともIII層として取り上げた。ともに包含層であるが、遺物からは時期の違いを明確にできない。

IV層 IV層は漸移層である。少量ではあるが遺物が出土する包含層である。

V層 V層はいわゆるローム層である。部分的に段丘堆積物とみられる礫を含んでいる。

(立田 理)



I層：10YR4/1	褐灰色(ややしまりあり 炭化物を少量含む) =耕作土
II層：10YR2/1	黒色(しまりなし 灰白色火山灰を部分的に含む)
II'層：7.5YR5/3	にぶい褐色(しまりなし 褐色風成層類似)
III層：7.5YR2/1-3/1	黒～黒褐色(粘性あり ややしまりあり) =遺物包含層
III'層：10YR4/2-3/2	灰黄褐色～黒褐色(ややしまりあり) =遺物包含層
IV層：10YR5/2	灰黄褐色(粘性あり しまりあり) =遺物包含層
V層：10YR5/8	黄褐色(粘性あり しまりあり)

図4 土層柱状図

メインセクション1

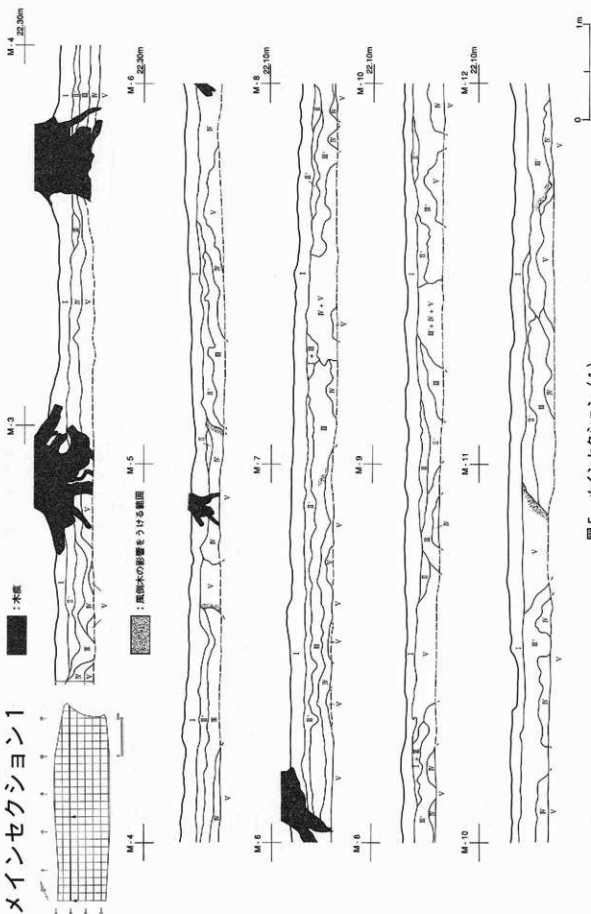


図5 メインセクション(1)

メインセクション1

I 調査の概要

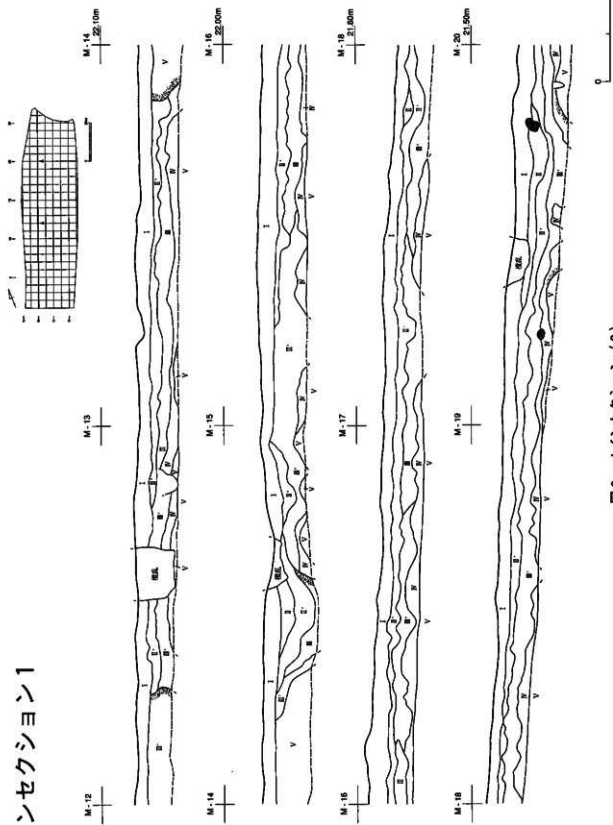


図6 メインセクション(2)

メインセクション1

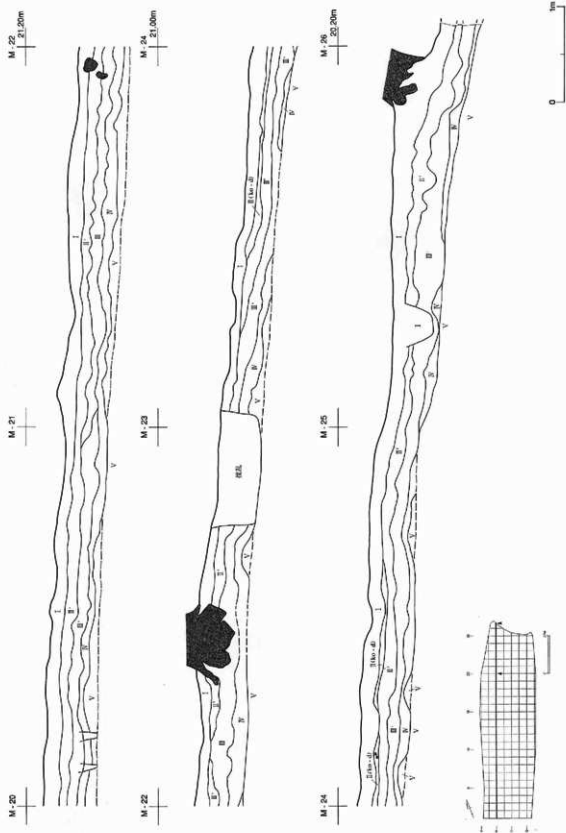


図7 メインセクション (3)

メインセクション2

I 調査の概要

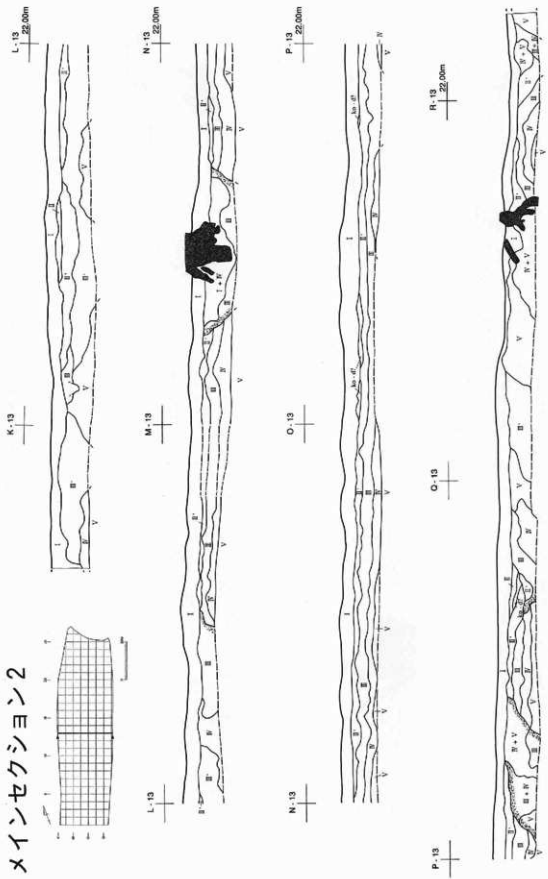


図8 メインセクション (4)

6 遺物の分類

(1) 土器

分類にあたってはこれまで渡高半島、噴火湾～太平洋沿岸で発掘調査された成果に基づく分類を踏襲した。出土した土器には縄文時代早期から晩期までのものがあり、縄文時代早期の資料をⅠ群、前期の資料をⅡ群、中期の資料をⅢ群、後期の資料をⅣ群、晩期の資料をⅤ群とした。

Ⅰ群 縄文時代早期に属するもの。

- a類 貝殻腹縁圧痕文、沈線文、条痕文のあるもの。中野A式、住吉町式に相当する土器群。
- b類 縄文、熱糸文、結糸体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの施される土器群。
 - b-1類 東銅路Ⅱ式、東銅路Ⅲ式に相当するもの。
 - b-2類 コッタロ式に相当するもの。(今回は出土していない)
 - b-3類 中茶路式に相当するもの。(今回は出土していない)
 - b-4類 東銅路Ⅳ式に相当するもの。

Ⅱ群 縄文時代前期に属するもの。

- a類 縄文の施された丸底、尖底を特色とする土器群。
 - a-1類 網文土器に相当するもの。(今回は出土していない)
 - a-2類 春日町式、静内中野式など、縄文の施された尖底を特色とするもの。
- b類 円筒土器下層式、植苗式、大麻V式に相当する土器群。

Ⅲ群 縄文時代中期に属するもの。

- a類 円筒土器上層式に相当する土器群。
- b類 榎林式、大安在B式、ノダツブⅡ式に相当する土器群。(今回は出土していない)

Ⅳ群 縄文時代後期に属するもの。

- a類 余市式、入江式、大津式に相当する土器群。(今回は出土していない)
- b類 船泊上層式、手稲式、笹調式、エリモB式に相当する土器群。
- c類 堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当する土器群。(今回は出土していない)

Ⅴ群 縄文時代晩期に属するもの。

- a類 大洞B式、上ノ国式に相当する土器群。(今回は出土していない)
- b類 大洞C式、大洞C'式に相当する土器群。(今回は出土していない)
- c類 大洞A式、大洞A'式、タンネトウシ式に相当する土器群。

Ⅵ群 続縄文時代に属するもの。(今回は出土していない)

Ⅶ群 擦文時代に属するもの。(今回は出土していない)

(鎌田 望)

I 調査の概要

(2) 石器等

豊野6遺跡で出土した石器を剥片石器群、磨製石器群、礫石器群、石製品群に大別し、その中で器種による分類を行った。以下に大別ごとに器種名を示す。

剥片石器群	石鏃 石槍・ナイフ 石鏃 両面調整石器 つまみ付きナイフ 匏状石器 スクレイパー 剥片石器片 Rフレイク Uフレイク 石核 フレイク	磨製石器群	磨製石斧 研磨石材 擦り切り残片
礫石器群	たたき石 すり石 ・北海道式石冠 ・偏平打製石器 石鋸 砥石 石皿・台石 加工痕のある礫 原石 礫・礫片	石製品群	石製品 異形石器

次に大別した分類に従って本遺跡出土の石器群を各群ごとに出土例を考慮し分類上不明瞭な点があると思われるものについては根拠を記し、特徴のあるものについては具体的な出土例をあげる。

剥片石器群

剥片石器群とは、主に頁岩等の石材を用いて剥片を素材として製作される石器を剥片石器とし、それに素材である剥片そのもの、剥片を得た結果生じた石核を加え総称したものである。

石槍・ナイフは、両面細部調整によって刃部を作り出す石器であり、明瞭に先端があり、おおむね左右対称につくられるものは石槍とし、先端がはつきりせず、左右対称ではないものについてはナイフとした。破片の中には両者の区別は不可能なものもあり、またどちらに属するか判断に迷う資料もあることから、同じ項目に含めた。

両面調整石器は、剥片の両面が調整されるものの、細部調整による刃部を持たず、比較的粗い調整によって製作されるもので、八木B遺跡（阿部ほか1992）等で出土している粗工両面調整品と呼ばれ

るものを含んでいる。ナイフとの違いは細部調整によるほぼ直線状に整形される刃部の有無である。

スクレイパーは、剥片の片面に細部調整による刃部を作り出すものを総称したものである。素材となる剥片の形状等から、7つに分類した。

- 1 剥片の両側縁に刃部がつくもの
- 2 原石面・節理面を残した剥片の側縁に刃部がつくもの
- 3 石刃状の縦長剥片に直線状の刃部がつくもの
- 4 エンドスクレイパー
- 5 石刃状の縦長剥片を利用したエンドスクレイパー
- 6 刃部が厚いもの
- 7 不定形な剥片を素材とするもの

石刃状の縦長剥片は、縦横の比がおおむね2:1以上で、背面に側縁に平行な稜線のあるもので、出土点数は少ないが、フレイクとつまみ付きナイフ、スクレイパーにみられる。

剥片石器片は剥片石器のおおむね1/2以下の破片で器種を限定できないものである。

Rフレイクは、加工痕とみられる連続しない剥離のある剥片である。

Uフレイクは、使用痕とみられる微細な剥離のある剥片である。

磨製石器群

磨製石器群とは研磨によって刃部を作る磨製石斧を中心として、その製作工程にかかわるとみられるものを総称したものである。

磨製石斧は小型の石斧であるいわゆる石のみも含まれている。

研磨石材は緑色泥岩などの石斧の素材とみられる礫で、研磨した痕跡、もしくは擦り切り技法によるとみられる溝があるものである。

礫石器群

礫石器群とは主に安山岩、流紋岩等の礫を用いて製作される石器を総称したものである。また他の石器群には含まれない礫・礫片は礫石器の素材となりうることを考慮して便宜上ここに含めた。さらに原石は本来剥片石器群に含まれるものであるが、本遺跡で多く出土している基盤層中に含まれる自然礫と剥片石器の区別が困難であったため、あえて礫石器群の中に含めた。

礫石器には複数の器種が複合している場合があるが、先後関係の明瞭なもの以外は原則として10ページの表の下位の分類を優先している（例えば、たたき石とすり石が複合している場合は、すり石とした）。

すり石は点数が多いため、北海道式石冠、偏平打製石器、すり石に細分した。

石製品群

石製品は破片ではあるが、研磨によって整形される板状のものが出土している。異形石器は黒曜石製のものが出土している。

(立田 理)

I 調査の概要

7 調査結果の概要

調査区にはほぼ全域にわたって風倒木による攪乱が及んでいる。調査区中央部の台地平坦部・縁辺部と調査区北側緩斜面で土壌1基、焼土6ヵ所を検出した。検出層位はIV層上面、IV層下位、V層上面である。周辺から出土した遺物と検出層位から、これらの遺構は円筒土器下層式期の所産と考えられる。また、北海道式石冠や石皿、砥石などが調査区のはほぼ全域のI層や風倒攪乱から出土している。

遺物は29,144点出土した。土器等は2,627点で、土器は縄文時代早期から晩期のものがあるが、量的には前期後半の円筒土器下層式、前期前半の春日町式が大半を占め、次いで中期前半の円筒土器上層式、早期後半の東銅路Ⅲ・Ⅳ式の順で、早期中葉の貝殻尖底文土器が僅かに出土している。後期及び晩期の土器はごく少量である。石器等は26,517点あるが大半は剥片や礫・礫片である。器種別ではスクレイパー、石核、Uフレイク、Rフレイク、たたき石が多く、次いで砥石、偏平打製石器、つまみ付きナイフ、両面調整石器、すり石、石鏃、石皿・台石、石鋸、北海道式石冠の順に出土している。石斧、石鏃、石槍、ナイフ、筥状石器は少ない。これらの他に研磨石材、擦切残片、異形石器、石製品が出土している。

(鎌田 望)

表1 遺構数一覧

種別	合計	種別	合計
土 壌	1	焼 土	6

表2 出土遺物一覧

土 器 等			石 器 等						
分 類	点 数		分 類	点 数		分 類	点 数		
	遺構	包含層		遺構	包含層		遺構	包含層	
I a		25	石 鏃		43	石 斧		20	
I b-1		198	石 槍		8	擦 切 残 片		3	
I b-4		193	ナ イ フ		6	研 磨 石 材		4	
II a		372	石 鏃		12	た た き 石		100	
II b	5	967	つまみ付ナイフ		51	す り 石		38	
III a		315	筥 状 石 器		3	北 海 道 式 石 冠		53	
IV b		20	両面調整石器		41	偏平打製石器		74	
V c		50	スクレイパー	1	369	石 皿		24	
類焼或粘土塊		482	異 形 石 器		1	石 皿 ・ 台 石		30	
			剥片石器片		10	砥 石		50	
			R フ レ イ ク		100	加工痕のある礫		26	
			U フ レ イ ク	1	116	礫 ・ 礫 片	1	3,399	
			石 核		131	原 石		26	
			フ レ イ ク	58	21,709	石 製 品		9	
計	5	2,622	計					61	26,456
土器等計		2,627	石器等計						26,517
総 計									29,144

II 遺跡の概要

1 遺跡の位置と周辺の遺跡

(1) 遺跡の位置

遺跡の所在する長万部町は内浦湾最奥部に位置する。この内浦湾最奥部の長万部から八雲にかけての帯は海岸段丘、河岸段丘が発達する地域として知られ、内浦湾に沿って帯状に海岸平野、海岸段丘、丘陵、山地が連なり、静狩川、ナイベコシナイ川、長万部川、紋別川、国縫川、ルコツ川などが内浦湾へと流れ込み、これらにより形成された河岸段丘がよく発達している（瀬川 1974）。

長万部町は東は豊浦町、北は黒松内町、西は今金町、南は八雲町に接している。内浦湾岸南西部の交通の要所であり、日本海側に至る J R 函館本線と国道 5 号線、虻田～伊達～室蘭を経て石狩低地帯へ至る J R 室蘭本線と国道 37 号線の分岐点である。市街地は海岸線に沿って南北に長く、北に静狩、西に二股、駅傍、南には中の沢や国縫の市街地がある。国縫から西には国道 230 号線と廃線となった瀬棚線が分岐している。

豊野 6 遺跡は海岸から直線距離で約 1 km 内陸、国縫川右岸の海岸段丘上標高 20～23 m にある。調査区は北と東を国縫川に流れ込む無名沢に挟まれた北東に緩やかに傾斜する台地の平坦部～緩斜面である。調査区の南西は段丘上位面となっている。国道 5 号線から見ると段丘上に国縫墓地（豊野 3 遺跡）が見える。遺跡は沢を挟んで墓地の裏側（北西）にある。国縫川左岸の海岸沿いには国縫の市街地がある。国縫はシャクシャインの戦いの際、アイヌと松前藩が戦った場所として知られている。国縫の南西に隣接する「豊野」は昭和 15 年からの行政字名で、それ以前は「茂調縫」「モクンネ」と表記されていた。これはアイヌ語の「モクンネナイ（黒き小川）」に由来するとされる（永田 1984、竹内 1987）。

(2) 周辺の遺跡

北海道教育委員会作成の埋蔵文化財分布図によれば長万部町には 45 ヶ所の遺跡が記載されている。これらの大半は縄文時代のものであり、大部分は海岸段丘上に立地する。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、後期石刃・細石刃に属するオバルベツ 2 遺跡（長万部町教育委員会（以下町教委と略） 1995、北海道文化財保護協会（以下保護協会と略） 2000）とオバルベツ 4 遺跡（町教委 1999）がある。

縄文時代

早期の遺跡は 9 ヶ所が調査されており、この時期の様相が明らかになってきた。オバルベツ 2 遺跡、富野 3 遺跡、富野 5 遺跡では集落と墓が発見された。オバルベツ 2 遺跡はアルトリ式、東銅路Ⅱ式、中茶路式期（保護協会 1999）、富野 3 遺跡は物見台式、東銅路Ⅱ・Ⅲ式、赤御堂式期（財）北海道埋蔵文化財センター（以下道埋文と略） 1999）、富野 5 遺跡は物見台式、アルトリ式期（保護協会 1999）である。オバルベツ 3 遺跡とオバルベツ 4 遺跡では東銅路Ⅱ・Ⅲ式に相当する土器が出土しており、前者では磨製石斧製作跡、後者では土壌群が検出されている（町教委 1999）。ナイベコシナイ 2 遺跡では東銅路Ⅳ式土器が出土し（町教委 1996）、柴原 2 遺跡では貝殻土器がまとまって出土している（町教委 1997）。また、柴原 2 遺跡と富野 3 遺跡では石刃鏃が出土している（町教委 1997、道埋文 1999）。

前期の遺跡は、静狩貝塚、中の沢 1 遺跡、富野 5 遺跡、オバルベツ 4 遺跡、花岡 2 遺跡、豊野 6 遺跡の 6 ヶ所があり、それぞれの遺跡から円筒土器下層式土器が出土している。花岡 2 遺跡では同時期

II 遺跡の概要

の集落と土壌が発見された（道埋文 2000）。

中期の遺跡は15カ所ある。円筒土器上層式期の住居跡がオバルベツ2遺跡で、同時期の墓の可能性のある土壌がナイベコシナイ2遺跡で検出されている（町教委 1996、保護協会 1999）。花岡3遺跡では天神山式に相当する時期の集落と土壌が発見された（道埋文 2000）。静狩貝塚では上層から中期前半、中期末～後期初頭の遺物（大場・田川 1955）、栄原2遺跡で煉瓦台式、ノグップⅡ式に相当する土器が出土した（町教委 1997）。

後期の遺跡は静狩貝塚、富野遺跡、坊主山遺跡、飯生神社裏遺跡、栄原2遺跡、富野3遺跡、オバルベツ4遺跡の7カ所がある。静狩貝塚で余市式土器（大場・田川 1955、長万部町史編集室（以下町史と略）1977）、栄原2遺跡で余市式、トリサキ式、大津式土器（町教委 1997）、富野遺跡では堂林式土器が出土している（町史 1977）。

縄文時代晩期の遺跡は2カ所ある。静狩川遺跡では大洞A式土器（八雲高校郷土研究部 1952）、富野3遺跡で大洞C式土器が出土している（道埋文 1999）。

縄文時代

縄文時代の遺跡は1カ所である。静狩川遺跡では恵山式土器が出土している（八雲高校郷土研究部 1952、町史 1977）。

中・近世

中世の遺跡では、アイヌ文化期のチャシ跡とされる国縫チャシ（町史 1977、北海道教育庁社会教育部文化課 1983）、アイヌ文化期の墓塚が発見された花岡遺跡（町史 1977）がある。近世の遺跡では安政2・3（1855・56）年に構築され、安政4（1857）年に廃止となった国指定史跡東蝦夷地南部藩・ラシャマンベ陣屋跡（町教委 1985）がある。（鎌田 望）

【引用・参考文献】＊「財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書」は「北埋調報」と略。

- | | | |
|-----------------|------|--|
| 大場利夫・田川賢蔵 | 1955 | 『静狩遺跡』長万部町 |
| 長万部町史編集室 | 1977 | 『長万部町史』 |
| 長万部町教育委員会 | 1985 | 『東蝦夷地南部藩陣屋跡ラシャマンベ陣屋跡』 |
| 長万部町教育委員会 | 1995 | 『オバルベツ2遺跡 栄原2遺跡』
(平成7年度 長万部町埋蔵文化財発掘調査概要図版集) |
| 長万部町教育委員会 | 1996 | 『ナイベコシナイ2遺跡』(長万部町埋蔵文化財調査報告 第1集) |
| 長万部町教育委員会 | 1997 | 『栄原2遺跡 1』 (長万部町埋蔵文化財調査報告 第2集) |
| 長万部町教育委員会 | 1999 | 『オバルベツ3遺跡 オバルベツ4遺跡』
(長万部町埋蔵文化財調査報告 第3集) |
| 瀬川秀良 | 1974 | 『日本地形誌 北海道地方』朝倉書店 |
| 竹内理三編 | 1987 | 『角川日本地名大辞典』角川書店 |
| 永田方正 | 1984 | 『初版 北海道蝦夷語地名解 復刻版』草風館 |
| 北海道教育庁社会教育部文化課編 | 1983 | 『北海道のチャシ』北海道文化財保護協会 |
| 北海道文化財保護協会 | 1999 | 『オバルベツ2遺跡』(北海道文化財保護協会報告書 第11集) |
| 北海道文化財保護協会 | 1999 | 『富野5遺跡』 (北海道文化財保護協会報告書 第12集) |
| (財)北海道埋蔵文化財センター | 1999 | 『長万部町 富野3遺跡』(北埋調報 第131集) |
| 八雲高校郷土研究部 | 1952 | 『長万部町における恵山文化の土器』 |



(この図は国土院蔵の発行の地形図、1:16,000(新万葉集) 30-14-21-9、平成3年2月1日発行)・1:16,000(国蔵) 30-14-21-1、平成4年2月1日発行)・1:16,000(国蔵) 30-14-21-1-1、平成19年2月1日発行)を参照して作成したものである。)

図9 遺跡の位置と周辺の遺跡

表3 長万部町の道跡一覧

番号	名称	所在地	立地	標高(m)	時期	文献
1	静狩川道跡	字静狩122-7-11, 130, 166	静狩川右岸砂丘上	5~6	縄文(晩期), 縄縄文	1・2
2	静狩貝塚	字静狩439-20-29, 38-47	低湿地に面した海岸段丘裾部	10-11	縄文(前・中・後期)	2・3
3	栄原道跡	字栄原97-1・2・4, 98-1ほか	中川原川左岸微高地	6-10	縄文(中期)	2
4	富野道跡	字富野138・140	オバルベツ川右岸段丘上	30-35	縄文(早・中・後期)	2
5	坊主山道跡	字富野117-1	海岸段丘上	30-35	縄文(中・後期)	2
6	豊野1道跡	字豊野133-1・2・4・5・7, 134	海岸段丘上	30-40	縄文	
7	国越チャシ	地点不明	国越川右岸に面した山	161.4	アイヌ期	2・4・5
8	豊野2道跡	字豊野195, 198, 210	ポンボナイ川左岸, 海岸段丘上	25-30	縄文	
9	飯生神社裏道跡	字長万部376, 374-1・2	オバルベツ川右岸, 海岸段丘上	13	縄文(中・晩期)	
10	トド山道跡	字富野102-2・8・16・31	海岸段丘上	20-21	縄文(中期)	2
11	オバルベツ道跡	字富野173	オバルベツ川左岸, 海岸段丘上	10-11	縄文(中期)	2
12	花園道跡	字花園48-1・2, 62-1	海浜砂丘	2.5-3	アイヌ期	
13	札幌農学校跡長万部陣地跡	字長万部375-1・2ほか	オバルベツ川右岸, 海岸段丘上	10-13	安政2~4(1855~57)	2・6
14	豊津道跡	字豊津176, 180, 258	幌内川左岸, 海岸段丘上	25-33	縄文	
15	豊野3道跡	字豊野123-1, 124	国越川右岸, 海岸段丘上	10-20	縄文	
16	トド山2道跡	字富野96	海岸段丘上, 南西側に沢	34-36	縄文(中期)	
17	南部藩長万部陣地跡	字長万部418-1	オバルベツ川右岸段丘上	10-15	縄文	
18	富野2道跡	字富野123-1, 124-1・2ほか	オバルベツ川右岸段丘上	30-35	縄文	
19	共立道跡	字共立345-1	海岸段丘上	45	縄文	
20	ナイベコシナイ1道跡	字共立474-1ほか	ナイベコシナイ川左岸, 海岸段丘上	30-40	縄文	
21	ナイベコシナイ2道跡	字共立51-1ほか	ナイベコシナイ川右岸, 海岸段丘上	15	縄文(早・中期)	7
22	ナイベコシナイ3道跡	字共立14ほか	ナイベコシナイ川右岸, 海岸段丘上	15	縄文	
23	栄原2道跡	字栄原64-1ほか	ゴクナナイ川右岸, 海岸段丘上	10	縄文(早・中・後期)	8・9
24	中京3道跡	字栄原187-3	中川原川左岸, 海岸段丘上	10	縄文	
25	オバルベツ2道跡	字富野195ほか	オバルベツ川左岸, 海岸段丘上	10	旧石器, 縄文(早・中期)	10・11
26	中の沢1道跡	字中の沢102	海岸段丘上	45	縄文(前期)	
27	中の沢2道跡	字中の沢101	海岸段丘上	40	縄文	
28	中の沢3道跡	字中の沢105-1	海岸段丘上	30	縄文	
29	中の沢4道跡	字中の沢105-1	海岸段丘上	30	縄文	
30	富野3道跡	字富野129, 131, 132, 135ほか	オバルベツ川右岸, 海岸段丘上	25-34	縄文(早・中・後期)	12
31	富野4道跡	字富野146-2・3・6・7, 147ほか	オバルベツ川右岸, 海岸段丘上	15-20	縄文(早期)	
32	国越道跡	字国越176-2・16・17ほか	国越川左岸, 傾斜地	7-15	不明	
33	豊野4道跡	字豊野71, 129, 130ほか	海岸段丘上	25-40	縄文	
34	豊野5道跡	字豊野24-1~3, 25-1ほか	海岸段丘上	30-35	縄文(中期)	
35	富野5道跡	字富野165-23	オバルベツ川右岸, 海岸段丘上	33	縄文(早・前期)	13
36	花園2道跡	字花園154, 224	海岸段丘上	40	縄文(前期)	14
37	花園3道跡	字花園149	海岸段丘上	50	縄文(中期)	14
38	オバルベツ3道跡	字富野179-2	オバルベツ川左岸	10	縄文(早期)	15
39	オバルベツ4道跡	字富野179-11, 227-9ほか	オバルベツ川左岸	10	旧石器, 縄文(早・前・中・後期)	15
40	豊野6道跡	字豊野127	国越川右岸, 海岸段丘上	20-23	縄文(早・前期)	16
41	中の沢5道跡	字中の沢102	準氷清に注ぐ沢の左岸, 段丘上	32-35	縄文(中期)	
42	富野6道跡	字富野165-23	段丘上	15-24	縄文(中期)	
43	富野7道跡	字富野165-23	段丘上	15-20	縄文(中期)	
44	富野8道跡	字富野165-23	段丘上	20-23	縄文	
45	豊津2道跡	字豊津193	海岸段丘上	31	不明	

【文献】

- ※シラズ名の「長万部町歴史文化財調査報告書」は「長沢調査」、「北海道文化財保護協会調査報告書」は「北沢調査」、「財団法人北海道歴史文化財センター報告書」は「北沢調査」と略。
 **報告書シラズ番号の併・集は略。
1. 八雲史跡博士研究部 1952 『長万部町における豊山文化の土葬』
 2. 長万部町史編纂室 1977 『長万部町史』
 3. 大場利夫・田川賢蔵 1955 『静狩遺跡』長万部町
 4. 川上十郎 1990 『長万部町史』
 5. 北海道教育庁教育社会教育部文化課 1983 『北海道のチャシ』北海道文化財保護協会
 6. 長万部町教育委員会 1985 『札幌農学校跡長万部陣地跡ラマンベ陣地跡』
 7. 長万部町教育委員会 1996 『ナイベコシナイ2道跡』(長沢調査1)
 8. 長万部町教育委員会 1995 『オバルベツ2道跡 塚原2道跡』(平成7年度 長万部町歴史文化財発掘調査成果報告書)
 9. 長万部町教育委員会 1997 『栄原2道跡 1』(長沢調査2)
 10. 北海道文化財保護協会 1999 『オバルベツ2道跡』(北沢調査11)
 11. 北海道文化財保護協会 2000 『オバルベツ2道跡(2)』(北沢調査13)
 12. (財)北海道歴史文化財センター 1999 『長万部町 富野3道跡』(北沢調査131)
 13. 北海道文化財保護協会 1999 『富野5道跡』(北沢調査12)
 14. (財)北海道歴史文化財センター 2000 『長万部町 花園2道跡 花園3道跡』(北沢調査130)
 15. 長万部町教育委員会 1999 『オバルベツ3道跡 オバルベツ4道跡』(長沢調査3)
 16. (財)北海道歴史文化財センター 2000 『長万部町 豊野6道跡』(北沢調査143)

2 遺跡周辺の地形

巻野6遺跡は、内浦湾沿いに発達した標高約19~21mの海岸段丘上に立地している。遺跡の立地する段丘は国縫川に面して平坦に続いているが、ほぼ同じ標高の平坦面が内浦湾沿いに延びていること、標高から判断すると長万部段丘(瀬川 1974)に相当するものとみられる。遺跡付近では国縫川と内浦湾の方向に緩やかに傾斜している。段丘と川の流域の平坦面との比高差は約10mである。

遺跡の東側には川に向かう1条の沢があり、その沢を挟んで内浦湾側は海に向かってやや張り出した部分となっている。ここは現在墓地として利用されている。

調査前の遺跡の状態は、植林による杉林であった。また第I章5節でも述べたように、調査区は畑の畔状のうねりが明瞭に残っている地点もあり、調査以前は畑として利用されていたと思われる。

図10は上段が明治29年の遺跡付近の地形である。遺跡の立地する段丘が国縫川、茂国縫川に挟まれ、内浦湾に向かって張り出す段丘として認識されていたことがわかる。下段は大正8年測量の地形図である。これによると遺跡の先端には荒地地を示すらしき記号がみとれる。遺跡の中央部は広葉樹林であったと思われる。

写真1は1948年の遺跡付近の様子である。国縫川が激しく流路を変えていること、また遺跡付近は畑作によるものとみられる区画が明瞭に見て取れる。

(立田 理)



巻野6遺跡周辺の空中写真(1948年4月23日撮影) (この写真は、国土地理院発行のものを複製したものである)

写真1 遺跡付近の航空写真

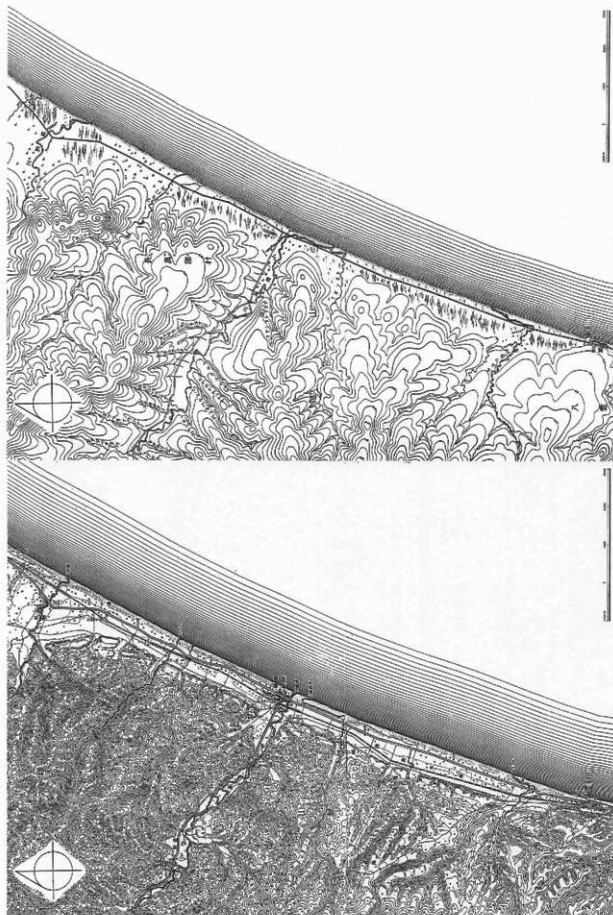


図10 遺跡付近の旧地形

これらの地図は右が「大日本帝國陸海河渠部発行、明治29年東京版北神道航業5万分の1 国儀」また左が「大日本帝國陸海河渠部発行、大正9年3月25日印刷 5万分の1 地形図 国儀」に復元されたものである。

III 遺構

1 概要

遺構としては土壌1基と焼土6ヵ所が発見されている。土壌(P-1)は、調査区中央部のM-12区で、F-1~3は、同様にM-12~L-12で、F-5は台地縁辺部のO-15区で、F-4・5は調査区北側緩斜面のL・M-23区で検出されている。検出層位はIV層上面がF-3・5、IV層下位がF-2・4、V層上面がP-1、F-1・6である。P-1はF-1の直下で検出した。遺物を伴う遺構は焼土3ヵ所で、F-3では焼土上面から頁岩のUフレイク1点、焼土中から礫1点、焼土下部から頁岩のスクレイパー1点が出土した。F-4からは焼土下部からII群b類の土器片が1点出土し、F-6では焼土中からII群b類の土器片4点と頁岩のフレイク58点が出土した。焼土は検出層位と周辺の遺物出土状況からいずれも縄文時代前期後半の円筒土器下層式期と推定できる。(録田 望)

表4 検出遺構一覧

遺構名	発掘区	検出層位	規模 (m)	出土遺物 (点)	時期
P-1	M-12-c・d	V層上面	0.70×0.60/0.49×0.38/0.16		縄文前期後半
F-1	M-12-d	V層上面	0.50×0.40/0.06		縄文前期後半
F-2	L-12-a	IV層下位	0.38×(0.28)/0.05		縄文前期後半
F-3	L-12-b	IV層上面	0.94×0.70/0.13	スクレイパー1、Uフレイク1、礫1	縄文前期後半
F-4	M-23-a	IV層下位	0.48×0.46/0.07	II群b類土器片1	縄文前期後半
F-5	O-15-a・b	V層上面	0.54×0.42/0.10		縄文前期後半
F-6	L-23-a	V層上面	0.75×0.68/0.14	II群b類土器片4、フレイク58	縄文前期後半

表5 検出層位別遺構一覧

遺構種別	IV層上面	IV層下位	V層上面	合計
土 壌			1	1
焼 土	1	2	3	6

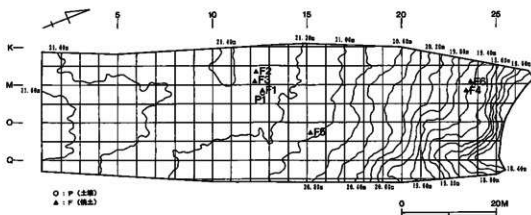


図11 遺構位置図

Ⅲ 遺構

2 土 坑

P-1

位置：M-12-c・d 規模：0.70×0.60/0.49×0.38/0.16

特徴 調査区中央部の平坦面に位置する。F-1の調査終了後、V層上面を精査すると、暗褐色の落ち込みを検出した。半載して壁、坑底を確認し、土壌であることがわかった。平面形は確認面、坑底ともに南北に長軸のある楕円形である。

遺物 出土していない。

時期 不明だが、覆土の状態、付近の遺物出土状態から、縄文時代前期のものである可能性が高い。

P-1

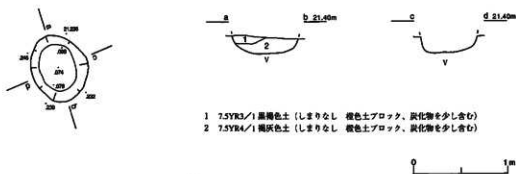


図12 P-1

3 焼 土

F-1

位置：M-12-d 規模：0.50×0.40/0.06

特徴 調査区中央部の平坦面に位置する。V層上面を精査中に確認した。焼成はやや弱く、不明瞭な焼土である。平面形は南部が張り出す不整な楕円形である。

遺物 出土していない。

時期 不明だが、覆土の状態、付近の遺物出土状態から、縄文時代前期のものである可能性が高い。

F-2

位置：L-12-a 規模：0.38×(0.28)/0.05

特徴 調査区中央部の平坦面に位置する。IV層上面を精査中に確認した。やや不明瞭な焼土である。東側を風倒擾乱によって壊されているが、平面形は北西-南東方向に長軸のある不整な楕円形を呈する。F-3と近接しており、その約2m北西に位置する。

遺物 出土していない。

時期 不明だが、覆土の状態、付近の遺物出土状態から、縄文時代前期のものである可能性が高い。

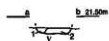
F-3

位置：L-12-b 規模：0.94×0.70/0.13

特徴 調査区南部の平坦面に位置する。IV層上面を精査中、明赤褐色の焼土を検出した。平面形は北東-南西方向に長軸のある不整形を呈する。比較的に明瞭で、遺跡中で最もはっきりした焼土である。F-2と近接しており、その約2m南東に位置する。

遺物 焼土の上面でUフレイク1点、礫1点、焼土覆土中からスクレイパーが1点出土している。

F-1



- 1 10YR4/1 (粘性あり ややしまりあり 明赤褐色土、黒色土粒を多く含む)
- 2 7.5YR4/2 (粘性あり 明赤褐色土、黒色土粒を少量含む)

F-2



- 1 2.5YR6/6 (粘性あり しまりあり IV層が黄土化したもの)

F-3



- 1 2.5YR5/8 明赤褐色土 (粘性あり しまりあり IV層が黄土化したもの)
- 2 V層との層移層

F-4



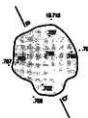
- 1 5YR3/1 黒褐色土 (粘性あり ややしまりあり 5YR5/6 明赤褐色土を層状に含む)
- 2 2.5YR5/8 明赤褐色土 (粘性あり しまりあり)

F-5



- 1 5YR4/1 褐灰色土 (粘性あり) しまりあり 2.5YR5/8 明赤褐色土を層状に含む)

F-6



- 1 10YR2/1 黒褐色～7.5YR4/1 褐灰色土 (粘性あり ややしまりあり)
- 2 5YR6/8 橙色土 (粘性あり しまりあり)



図13 F-1～6

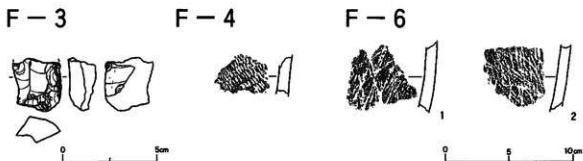


図14 焼土出土の遺物

1はスクレイパーである。大部分が欠損しているが、縦長の薄片を利用しているとみられ、背面側の一側縁に刃部が付けられるものである。

時期 付近に時期を決定できる遺物が出土しておらず、不明であるが、検出面から考えると縄文時代前期のものである可能性が高い。

F-4

位置：M-23-a 規模：0.48×0.46/0.07

特徴 調査区北部の緩斜面に位置する。IV層上面を精査中に明赤褐色の焼土を確認した。平面形は東西に長軸のある不整な楕円形を呈する。F-6と近接しており、その約1m南東に位置する。

遺物 焼土の覆土中からII群b類土器片が1点出土している。地文はLRの0段多条である。

時期 検出面から縄文時代前期のものである可能性が高い。

F-5

位置：O-15-a・b 規模：0.54×0.42/0.10

特徴 調査区中央部の平坦面に位置する。IV層上面を精査中に明赤褐色土粒を斑状に含む褐灰色土の広がりを確認した。平面形は北西南東方向に長い不整楕円形を呈する。

遺物 出土していない。

時期 不明だが、検出面から考えると縄文時代前期のものである可能性が高い。

F-6

位置：L-23-a 規模：0.75×0.68/0.14

特徴 調査区北部の緩斜面に位置する。V層上面を精査中に明赤褐色土粒子を斑状に含む黒褐色土の広がりを検出した。平面形は西方向にやや張り出す不整円形である。F-4と近接しており、その約1m北西に位置する。

遺物 上面から燃赤文の施されたII群b類土器片4点、フレイク58点が出土している。

時期 上面から出土した土器から縄文時代前期の時期のものと見られる。(立田 理)

表6 遺構出土掘載土器一覧

番号	遺構	遺物番号	合計点数	層位	分類	図版番号	備考
1	F-4	1	1	焼土下部	II b	14	LR、0段多条
1	F-6	1	2	焼土	II b	14	燃赤文
2	F-6	2	2	焼土	II b	14	燃赤文

表7 遺構出土掘載石器一覧

番号	遺構	遺物番号	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	備考
1	F-3	4	焼土下部	スクレイパー	頁岩	2.8	2.6	1.4	8.9	14	

Ⅳ 包含層出土の遺物

1 概要

縄文時代前期後半円筒土器下層式期の遺物を中心に、土器2,622点と石器等26,456点が出土した。また、焼成粘土塊に類する焼きの弱い不定形のもの482点出土している。

2 土器等

土器は量的には縄文時代前期と早期を中心に、中期、晩期、後期の順に出土している。これらのうち、本来の遺物包含層であるⅢ・Ⅳ層から出土したものは360点(16.8%)である(表8)。

縄文時代早期の土器(図18-1~17, 表9, 写真図版10)

I群a類(1・2): 1・2ともに口唇の断面形は尖り気味である。1には刺突文、貝殻圧痕文、沈線文が施され、内面には横走る条痕文が認められる。胎土には小礫と黒色鉱物を含む。2は無文で器面・内面に指頭による調整痕が認められる。内面は平滑で炭化物が付着している。

I群b-1類(3~7): 口唇断面形は丸みを帯びたもの(3・5)と尖り気味のもの(4)がある。文様は、短縄文(3・4・7)、LR斜縄文(3・4)、RL斜縄文(5)、LRとRLの羽状縄文(6)がある。内面調整は指頭による横ナデ(3・4・6・7)、筧状工具による横ナデ(5)がある。6・7は同一個体で、指頭による調整痕が顕著で、内面に指頭痕がある。4の内面には炭化物が付着している。胎土に海綿骨針を含むもの(4)、小礫を含むもの(6・7・8)がある。

I群b-4類(8~17): 口唇断面形は角形(8)と丸みを帯びたもの(9)がある。9は口縁が内湾する自縄自巻RL(8・12・13・16)、自縄自巻LRとRL(9~11・15・17)の原体による縄文により羽状を構成する。いずれも胎土に砂粒を含む。

縄文時代前期の土器(図17, 図18-18~40, 表9, 写真図版10・11)

Ⅱ群a類(図18-18~21): 0段多条の太い原体による縄文が施される。21には棒状工具による沈線文が施されている。いずれも内面はナデ調整されており、胎土に繊維と海面骨針を含む。

Ⅲ群b類(図17, 図18-22~40): 図17の復元土器は推定口径28.9cm、推定器高48.5cm、底径13.6cmの平縁の深鉢形土器である。口唇部が僅かに外反し、口縁から胴下部に燃糸文、胴下部から底部にはLRの斜縄文が施される。底部は上げ底である。内面は細目の筧状工具により磨かれている。焼

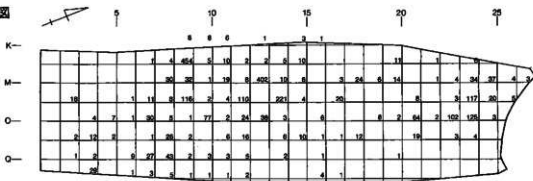
表8 包含層出土土器等層別出土点数一覧

	I 群			II 群		III 群	IV 群	V 群	土 器 合 計	類焼成 粘土塊	土器等 合 計	
	a類	b-1類	b-4類	a類	b類	a類	b類	c類				
出 土 層 位	I 層	0	42	34	240	228	160	4	708	50	758	
	Ⅲ 層	0	104	6	7	76	20	1	214		214	
	Ⅳ 層	0			99	13	24		146		146	
	風割推乱	25	52	143	26	649	111	15	50	1,071	432	1,503
	(Ⅱ 層)	(25)	(48)	(103)	(8)	(503)	(46)	(4)	(29)	(766)	(20)	(786)
	(Ⅳ 層)	(1)	(32)	(14)	(143)	(63)	(11)	(21)	(285)	(412)	(697)	
	(Ⅴ 層)	(3)			(3)	(2)			(8)		(8)	
	(区分乱)				(8)	(4)			(12)		(12)	
	攪乱				1				1		1	
	合 計	25	198	193	372	967	315	20	50	2,140	482	2,622
対土器合計比(%)	1.2	9.3	9.0	17.4	45.2	14.7	0.9	2.3	100	*18.4	100	

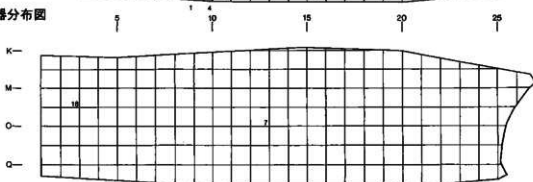
*類焼成粘土塊については対土器等合計比

IV 包含層出土の遺物

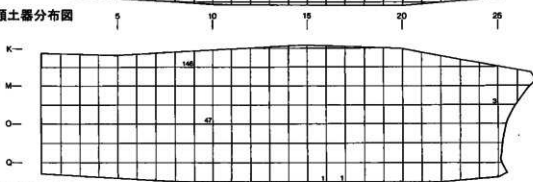
土器等分布図



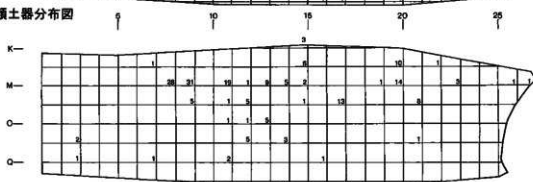
I群 a 類土器分布図



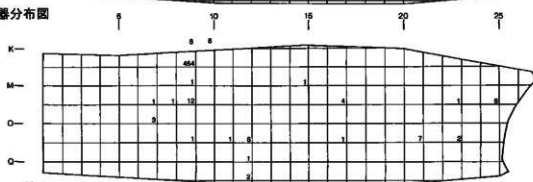
I群 b-1 類土器分布図



I群 b-4 類土器分布図



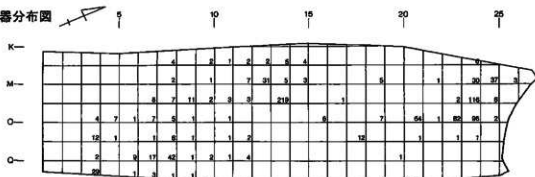
II群 a 類土器分布図



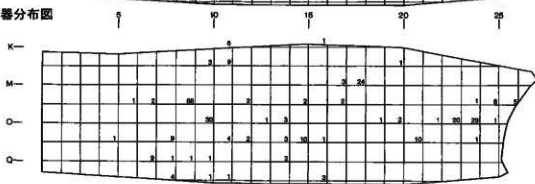
0 20M

図15 包含層出土土器分布図 (1)

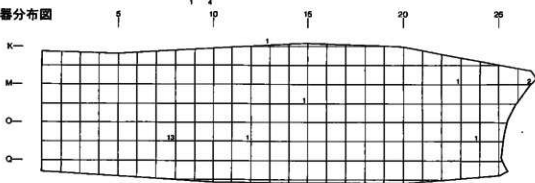
II 群 b 類土器分布図



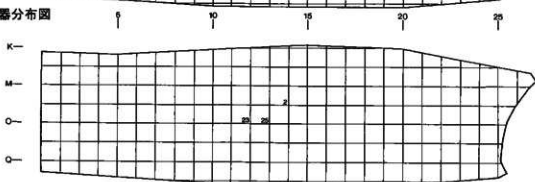
III 群 a 類土器分布図



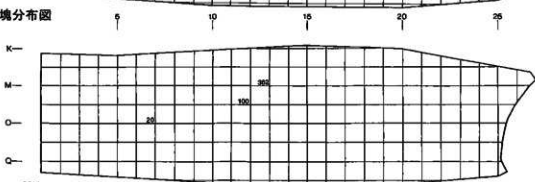
IV 群 b 類土器分布図



V 群 c 類土器分布図



類焼成粘土塊分布図



0 20M

図16 包含層出土土器分布図(2)

IV 包含層出土の遺物

成は良好で胎土に繊維と海綿骨針を含む。破片資料には口縁に縄線文のあるもの(22~24)、綾絡文のあるもの(25・26)、縄文のみのもの(27)がある。25・26は口縁部が外反する。28は頸部の隆帯が刻まれ、体部に捺糸文と綾絡文が施される。体部の施文は捺糸文で、単軸絡糸体第3類の原体による網目状捺糸文(30)や捺糸文を重複させて施したもの(32・39)もある。内面調整は磨かれているもの(24~35)とナデ調整されたもの(36・37)がある。胎土には繊維と海綿骨針を含む。底部(38~40)は上げ底気味である。

縄文時代中・後・晩期の土器(図18~41, 表9, 写真図版11)

Ⅲ群a類(41~45): 41は口縁肥厚帯の貼付に細いR L原体による圧痕がある。42は口縁にL Rの縄文が施されている。43にはR L + L Rの結束第1種の原体による羽状縄文、44にはL Rの斜行縄文

が施される。45はR L縄文が底部付近で方向を変えて施されている。内面調整は磨かれているもの(43)とナデ調整されたもの(41・42・44・45)がある。胎土には僅かに砂粒と小礫を含む。

Ⅳ群b類(46~48): 46は口縁の無文部分で内面には炭化物が付着する。47・48の地文はR Lの斜行縄文である。47は地文が張り出した底部直上で指頭により擦り消される。48の内面は磨かれている。Ⅳ群b類は3個体のみの出土で、胎土には砂粒を含む。

Ⅴ群c類(49・50): 49は口縁の無文部分。50には縦走気味のL Rの縄文が施される。Ⅴ群c類はこの2個体のみの出土である。いずれも焼成がよく、胎土には黑色鉱物と砂粒を含む。
類焼成粘土塊(表9, 写真図版11)

4カ所から482点出土した。出土層位はI層および風倒擾乱である。破片は厚さ0.3~3cmで、比重は土器や土製品よりも軽く、形状は不定形である。非常に脆く洗浄中に溶解したのもあった。写真図版にのみ掲載した。(鎌田 望)

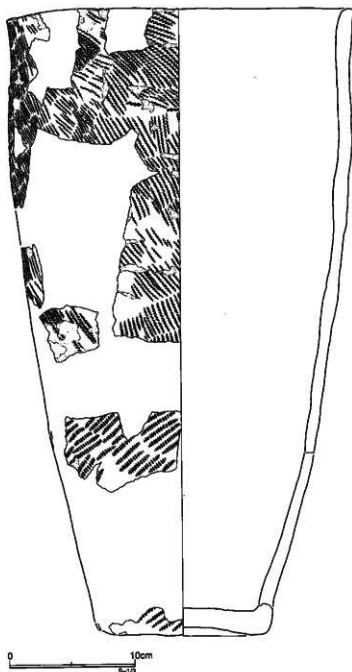


図17 包含層出土の土器(1)

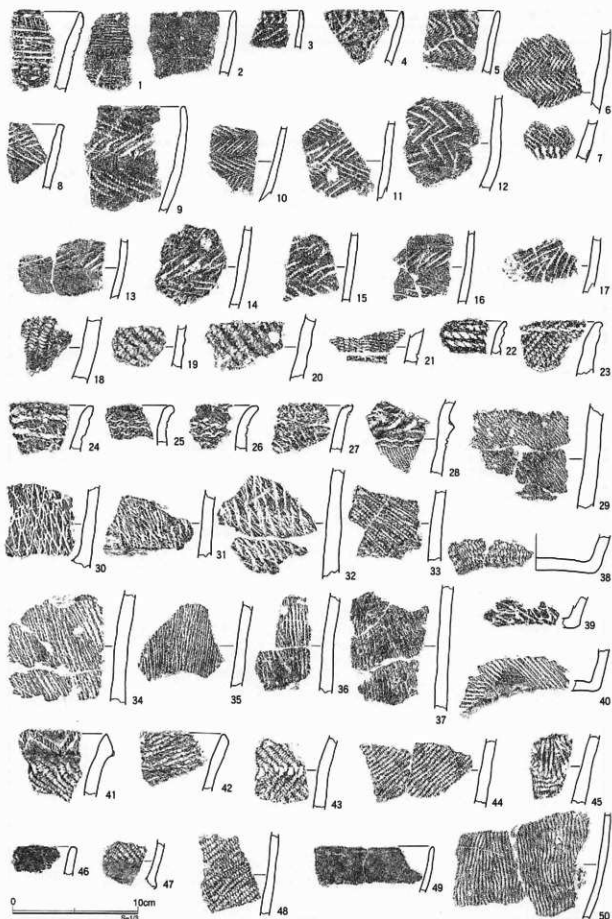


図18 包含層出土の土器（2）

IV 包含層出土の遺物

表9 包含層出土土器載土器等一覧

図番	番号	遺物番号	層位	点数	分類	器種	部位	同一個体破片の遺物番号、層位(点数)、合計破片点数	施文などの特徴
17	-	M-13-17	風例IV層	182	II b	深鉢	-	M-13-1, I層(12), M-13-17, 風例IV層(10),	熱赤文, LR新縄文
		M-13-18	風例IV層	9				M-13-18, 風例IV層(1), 214点	
18	1	M-2-4	風例IV層	1	I a	深鉢	口縁	M-2-4, 風例IV層(17), 18点.	貝殻瓦文, 沈没文
	2	N-12-21	風例IV層	1	I a	深鉢	口縁	N-12-21, 風例IV層(6), 7点.	無文
	3	Q-15-11	風例IV層	1	I b-1	深鉢	口縁		短縄文, LR縄文
	4	Q-16-7	風例IV層	1	I b-1	深鉢	口縁		短縄文, LR縄文
	5	N-9-22	風例IV層	1	I b-1	深鉢	口縁	N-9-22, 風例IV層(43), N-9-26, 風例IV層(1), 47点.	R L縄文
			N-9-26	風例IV層	2				
	6	K-8-16	I層	1	I b-1	深鉢	胴部	K-8-1, I層(1), K-8-16, I(37).	短縄文,
	7	K-8-16	I層	2				K-8-25, Ⅱ層(103), 144点. 6・7は同一個体	RL+LR羽織縄文
	8	L-10-19	風例IV層	1	I b-4	深鉢	口縁	L-10-19, 風例IV層(17), 18点.	白縄白巻RL
	9	K-19-4	風例IV層	1	I b-4	深鉢	口縁	K-19-4, 風例IV層(8), 9点.	白縄白巻LRとRL
	10	O-20-6	I層	1	I b-4	深鉢	胴部		白縄白巻LRとRL
	11	M-14-15	I層	1	I b-4	深鉢	胴部		白縄白巻LRとRL
	12	K-19-9	風例IV層	1	I b-4	深鉢	胴部		白縄白巻RL
	13	M-16-36	風例IV層	2	I b-4	深鉢	胴部	L-13-26, 風例IV層(5), M-16-36, 風例IV層(11), 18点.	白縄白巻RL
	14	L-8-30	風例IV層	1	I b-4	深鉢	胴部		白縄白巻LRとRL
	15	L-19-4	I層	1	I b-4	深鉢	胴部	L-19-4, I層(10), 11点	白縄白巻LR
	16	M-20-8a	風例	3	I b-4	深鉢	胴部	M-20-8 a, 風例(2), 5点.	白縄白巻RL
	17	M-20-8b	風例	2	I b-4	深鉢	胴部	M-20-8 b, 風例(1), 3点.	白縄白巻LRとRL
	18	L-8-18	I層	1	II a	深鉢	胴部		LR縄文
	19	J-8-2	I層	1	II a	深鉢	胴部		RL縄文
	20	J-9-4	風例IV層	1	II a	深鉢	胴部	J-9-4, 風例IV層(6), J-9-5, 風例IV層(1), 8点.	RL縄文
	21	Q-11-23	風例IV層	1	II a	深鉢	胴部		沈没文, RL縄文
	22	N-23-2	I層	1	II b	深鉢	口縁		縄織文
	23	M-23-6	I層	1	II b	深鉢	口縁	M-23-6, I層(1), 2点	縄織文, LR縄文
	24	K-14-1	I層	1	II b	深鉢	口縁		縄織文
	25	O-3-14	風例IV層	1	II b	深鉢	口縁		波状文, LR縄文
	26	Q-8-8	IV層	1	II b	深鉢	口縁		波状文
27	O-7-44	IV層	1	II b	深鉢	口縁	O-7-44, IV層(3), 4点	RL縄文	
28	O-3-29	風例IV層	1	II b	深鉢	胴部		波状文, 熱赤文	
29	M-23-28	風例IV層	4	II b	深鉢	胴部	M-23-28, 風例IV層(59), 63点.	熱赤文	
30	M-6-19	風例IV層	2	II b	深鉢	胴部	M-6-19, 風例IV層(5), M-7-1, I(4), 11点.	網目状熱赤文	
31	N-20-38	風例IV層	1	II b	深鉢	胴部	N-20-38, 風例IV層(1), N-20-38, 風例IV層(6), 8点.	熱赤文	
32	L-23-1	I層	1	II b	深鉢	胴部	L-21-1, I層(2), L-23-21, 風例IV層(2), 6点.	熱赤文	
		L-23-21	風例IV層	1					
33	N-20-34	風例IV層	3	II b	深鉢	胴部		熱赤文	
34	M-23-7	I層	4	II b	深鉢	胴部	M-23-7, I層(21), M-23-28, 風例IV層(5), 30点.	熱赤文	
35	O-3-14	風例IV層	1	II b	深鉢	胴部	O-3-14, 風例IV層(2), 3点.	熱赤文	
36	N-18-1	I層	3	II b	深鉢	胴部	N-18-1, I層(4), 7点	熱赤文	
37	L-24-19	風例IV層	3	II b	深鉢	胴部	L-24-19, 風例IV層(34), 37点	熱赤文	
38	N-4-15	風例IV層	5	II b	深鉢	底部	N-4-15, 風例IV層(2), 7点.	熱赤文	
39	M-23-7	I層	2	II b	深鉢	底部	M-23-7, I層(1), 3点.	網目状熱赤文	
40	N-23-2	I層	2	II b	深鉢	底部		熱赤文	
41	K-19-10	風例IV層	1	II a	深鉢	口縁		短付文, 縄文瓦	
42	N-24-2	I層	1	II a	深鉢	口縁		LR縄文	
43	N-18-2	I層	1	II a	深鉢	胴部		RL+LR羽織縄文	
44	P-6-1	I層	2	II a	深鉢	胴部		LR縄文	
45	L-17-24	風例IV層	1	II a	深鉢	胴部	L-17-5, 風例IV層(1), L-17-24, 風例IV層(1), 3点.	RL縄文	
46	O-7-45	風例IV層	1	IV b	深鉢	口縁	O-7-12, I層(3), O-7-45, 風例IV層(9), 13点.	無文部分・磨治	
47	L-22-11	風例IV層	1	IV b	深鉢	胴部		磨治縄文	
48	J-12-16	風例IV層	1	IV b	深鉢	胴部		LR縄文	
49	N-12-26	風例IV層	2	V c	浅鉢	口縁	N-11-16, 風例IV層(3), N-12-26, 風例IV層(11), 16点.	無文部分	
50	N-11-16	風例IV層	2	V c	深鉢	胴部	N-11-16, 風例IV層(14), N-12-26, 風例IV層(7), 23点.	波状文, LR縄文	
*51	N-6-24	風例IV層	2	不明	-	-	N-6-24, 風例IV層(19), 20点, 写真のみ掲載		
*52	N-11-21	I層	1	不明	-	-	N-11-21, I層(83), 84点, 写真のみ掲載		

*層位の項で風例IV層, 風例IV層, 風例IV層はそれぞれ風例IV層中のIV層土, IV層土, V層土から出土したことを示す。*51・52は写真図説にのみ掲載。

3 石器等

概要

I層から出土したものを含め、包含層より出土した石器等の総点数は26,456点であり、石器群ごとの内訳は、剥片石器群が22,599点、磨製石器群は27点、礫石器群が3,820点、石製品群は10点となっている。

石鏃(1~8)

石鏃は43点出土し、うち破片は6点である。木葉状を呈するものが最も多く16点出土している。三角形を呈するものが13点、菱形を呈するもの1点、有茎のものが8点、形態の不明なものは5点出土

表10 包含層出土石器等層位別出土点数一覧

石器群	器種	I層	Ⅲ・Ⅳ層	風倒攪乱	計
剥片石器群	石 鏃	32	4	7	43
	石槍・ナイフ	6	2	6	14
	石 鏃	6	0	6	12
	両面調整石器	26	7	8	41
	つまみ付ナイフ	23	6	22	51
	筥状石器	2	0	1	3
	スクレイパー	206	34	129	369
	剥片石器片	7	0	3	10
	R フレイク	71	11	18	100
	U フレイク	44	42	30	116
	石 核	87	10	34	131
	フ レ イ ク	11,237	2,430	8,042	21,709
磨製石器群	磨 製 石 斧	8	3	9	20
	研 磨 石 材	2	1	1	4
	擦 切 残 片	1	0	2	3
礫石器群	た た き 石	61	11	28	100
	す り 石	31	3	4	38
	すり石(北海道式石冠)	34	1	18	53
	すり石(扁平打製石製)	45	8	21	74
	石 鋸	15	0	9	24
	砥 石	28	0	22	50
	石皿・台石	16	4	10	30
	加工痕のある礫	12	1	13	26
	礫・礫片	2,358	238	803	3,399
	石製品群	石 製 品	4	5	0
異 形 石 器		1	0	0	1
原 石	原 石	13	3	10	26
合 計		14,376	2,824	9,256	26,456

IV 包含層出土の遺物

している。1は黒曜石製である。先端は欠損するが、形状は三角形で基部は弱い凹基である。丁寧な細部調整が全面に施される。2～8は頁岩製である。4のみがやや珪質が多い。2～4は三角錐である。2、3は三角形平基。4は三角形凹基であるが、中央部よりやや下に最大幅があるもの。5、6は木葉状を呈するものである。7は菱形のものとみられるが、基部の先端を欠損している。8は有茎錐である。

石槍・ナイフ (9～14)

14点出土し、うち破片は6点である。すべて頁岩製である。9、10は茎が明瞭に作られるものである。9は先端を入念に細部調整し、錐状に尖るものである。基部につまみ付きナイフ状の抉りが作られる。10はかえしが明瞭に作られるものである。13は大型の石槍の破片とみられる。14は最大幅が中央以下にあるもので、やや粗い加工である。器形はややねじれている。先端は右面のみの片面調整によって整形されている。

石錐 (15～17)

12点出土している。黒曜石製1点、他はすべて頁岩製である。15は石錐の転用品とみられるものである。16、17は剥片の一部を利用して機能部を作り出したものである。17は先端が摩滅している。

つまみ付きナイフ (18～25)

51点出土している。うち破片は9点である。すべて頁岩製である。形態のわかるものは身部が両面調整によるもの5点、片面調整によるものが37点出土している。23、25は身部が両面調整によって作られるもので、本遺跡ではこのほか3点が出土している。18は背面に稜線を残すもので比較的浅い調整によって刃部が作られるものである。21は身部の下端を両面加工によって先端を作り出したもので、石錐とするべきものかもしれない。

籠状石器 (26)

3点出土している。26は下端にやや丸みのある刃部の作られるものである。

両面調整石器 (27～31)

41点出土している。すべて頁岩製である。木葉形のもの (28・29)、いびつな小判状のもの (30) がある。31は破片とみられる。

スクレイパー (32～50)

369点出土している。うち黒曜石製は1点である。刃部、剥片の形状から、7つに分類した

- 1 剥片の両側縁に刃部がつくもの (32～40)
127点出土している。すべて頁岩製である。34～36の様な縦長「J」の字の剥片を利用し、先端に向かってややカーブする刃部がつくものが多い。また37のように、剥片の側縁に直線状の刃部が付くものもある。39は先端がやや尖るものである。40は腹面に刃部が作られるものである。
- 2 原石面もしくは節理面を残した剥片の側縁に刃部がつくもの (41～44)
62点出土している。すべて頁岩製である。この形態のものは、直線状の刃部 (42、44) かやや外に張り出す刃部がつくものが多い。41は両側縁に刃部が作られるものであるが、一応ここに含めておく。
- 3 石刃状の縦長剥片に直線状の刃部がつくもの (45)
14点出土している。石刃状の縦長剥片を利用するものである。同様の特徴を示す剥片、つまみ付きナイフ、エンドスクレイパー、Uフレイクを含めると25点出土している。45は縦長剥片を素材とし、素材の側面に片面細部調整によって刃部が付けられる。
- 4 エンドスクレイパー (46)
2点出土している。46は、涙滴状の剥片を利用し、剥片の下端に急角度の刃部が付けられるもので

ある。

5 3と同様の剥片を素材とするエンドスクレイパー (47・48)

3点出土している。47はやや涙滴状の厚い剥片の下端を刃部とするものである。48は縦長剥片を利用し、同様の調整がされるものである。

6 刃部が厚いもの (49・50)

この2点のみ出土している。2点とも頁岩製である。49は横方向の断面が逆「ノ」の字状に屈曲した縦長剥片を利用し、剥片の両側縁から調整して急角度の刃部を作るものである。50はおそらく両面調整石器とみられる石器から剥離した剥片を素材とし、一側縁に刃部を付けたものである。

7 不定形な剥片を素材とするもの

上記分類以外の不定形な剥片を利用し、剥片の側縁を刃部とするものである。169点出土している。うち1点は黒曜石製で、残りは頁岩製である。これらは図示していない。

Rフレイク (51)

100点出土している。頁岩製のものが99点、黒曜石製1点が出土している。51は石核とするべきかもしれない。背面に原石面を残し、上下方向から剥離した後、方向を変えて右から剥離した剥片を利用し、腹面側にやや粗い調整が入るものである。両面調整石器または粗工両面調整品の未製品の可能性もある。

石核 (52~54)

131点出土している。すべて頁岩製である。52は作業面、打面が比較的確なものである。53、54は両面を円周状に剥離するものである。

フレイク (55~58)

21,709点出土している。55~58は背面に稜線が残る石刃状の縦長剥片である。同様の形状を呈する剥片は計14点出土している。

石斧 (59~62)

20点出土している。うち8点が破片である。59は片岩製、その他は緑色泥岩製である。59、60は偏刃を呈する。61は基部が細くなるもの。62は石のみである。

たたき石 (63~66)

100点出土している。流紋岩、安山岩等の礫を利用しているものが多い。64は準大の石を利用し、一端を使用している。65、66は偏平でやや長い礫の両端を使用するものである。

すり石 (67・68)

38点出土している。流紋岩、安山岩などを利用しているものが多い。67は断面が三角形を呈するもので、稜線の一つを使用面とするものである。68はやや細長の礫を利用するものである。

北海道式石冠 (69~76)

53点出土している。うち33点が全体の1/2以下の破片である。完形品としたものも全て欠損や作業面に剥離がみられる。石材は、ほとんどが安山岩で閃緑岩 (69)、凝灰岩 (76) もある。69は前後方向に片減りするもの、71、72、75は左右方向に片減りするものである。

偏平打製石器 (77~83)

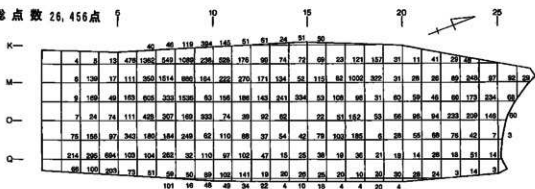
74点出土し、破片は31点である。全て安山岩製である。いずれも作業面は狭い。77、79は礫の剥片を素材とし、周縁をうち欠いて整形されている。その他は節理面の残る礫を素材として利用している。

石鐮 (84~86)

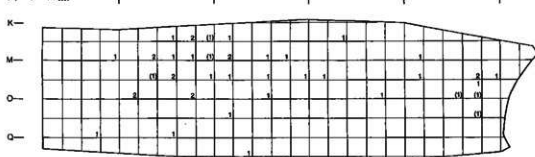
24点出土している。作業面の断面の形状は84、85がU字状、86がややV字状を呈する。

IV 包含層出土の遺物

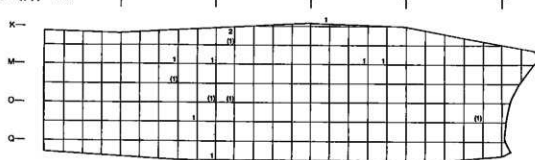
石器等総点数 26,456点



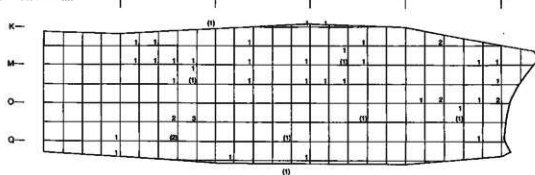
石 鏃 (片) 43点



石 槍・ナイフ (片) 14点



つまみ付きナイフ (片) 51点



両面調整石器 41点

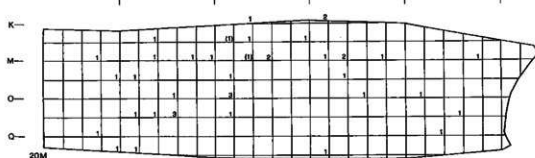
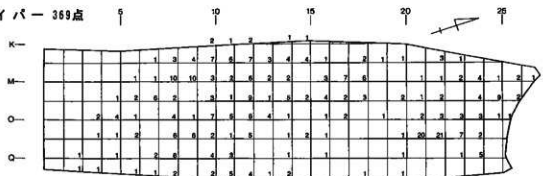
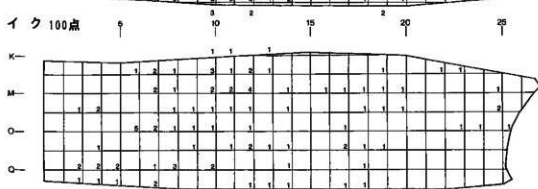


図19 包含層出土石器分布図 (1)

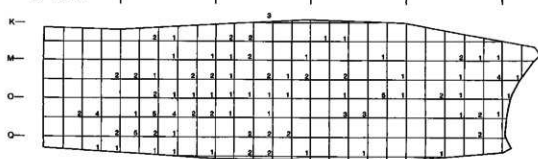
スクレイパー 369点



R フレイク 100点



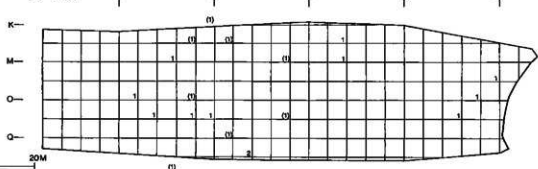
石核 131点



フレイク 21,709点



石斧 20点



0 20M

図20 包含層出土石器分布図(2)

IV 包含層出土の遺物

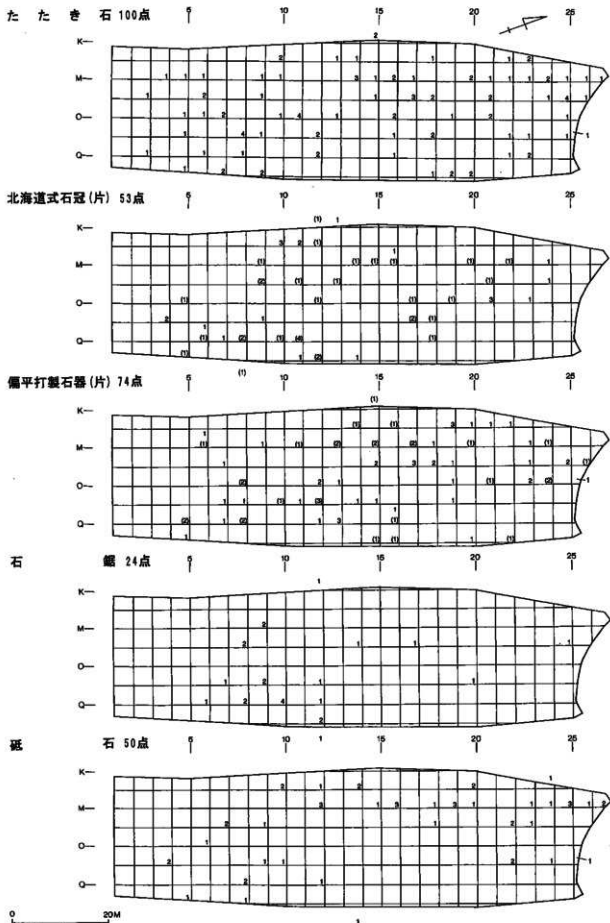


図21 包含層出土石器分布図(3)

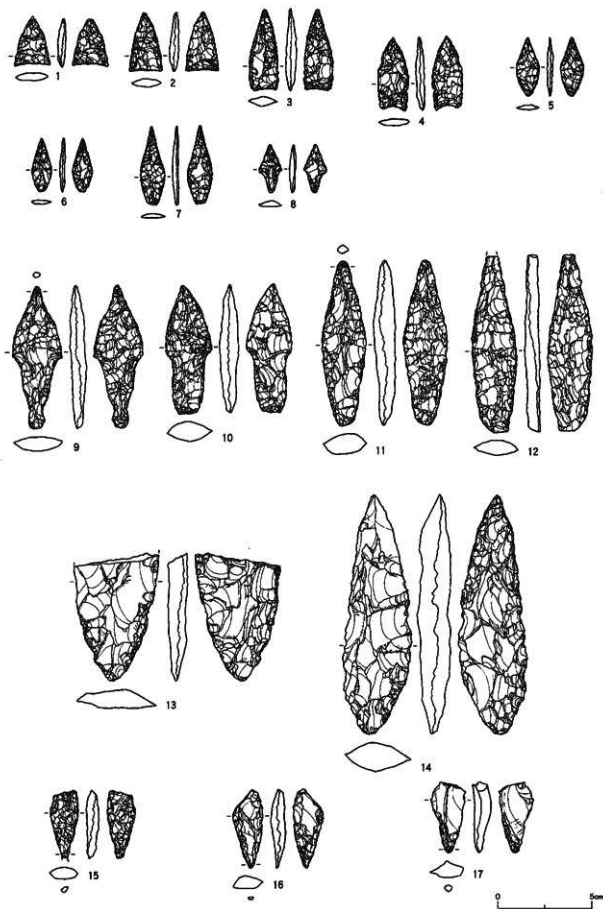


図22 包含層出土の石器 (1)

IV 包含層出土の遺物

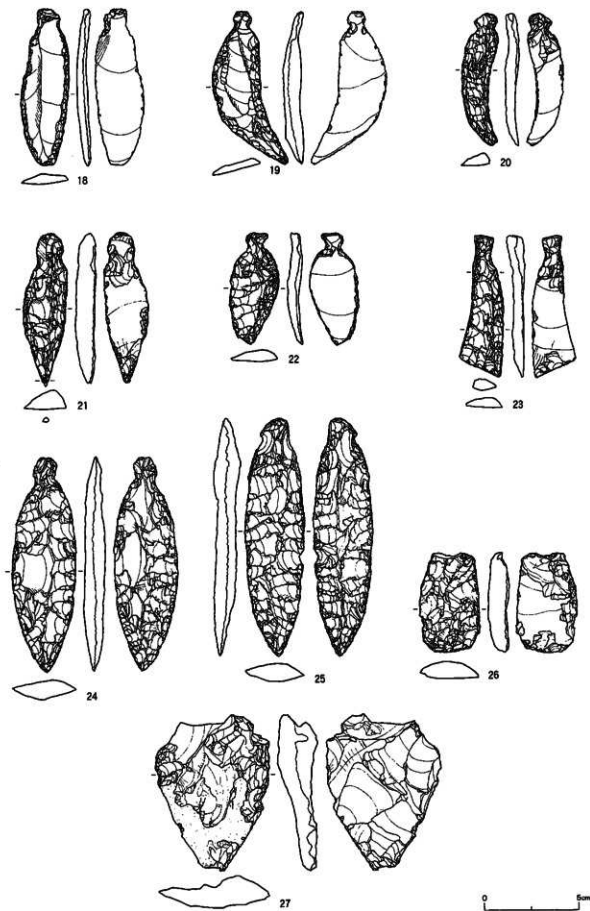
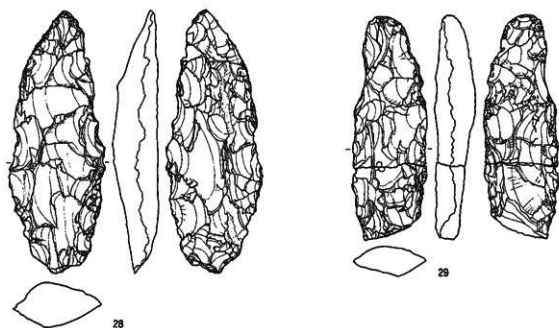
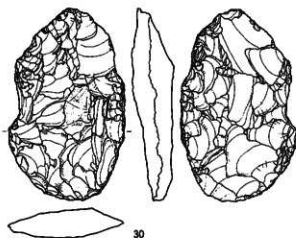


図23 包含層出土の石器 (2)

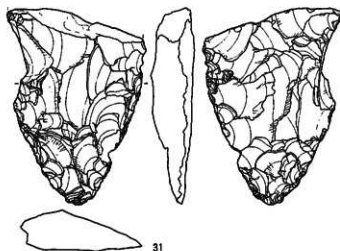


28

29



30



31



図24 包含層出土の石器 (3)

IV 包含層出土の遺物

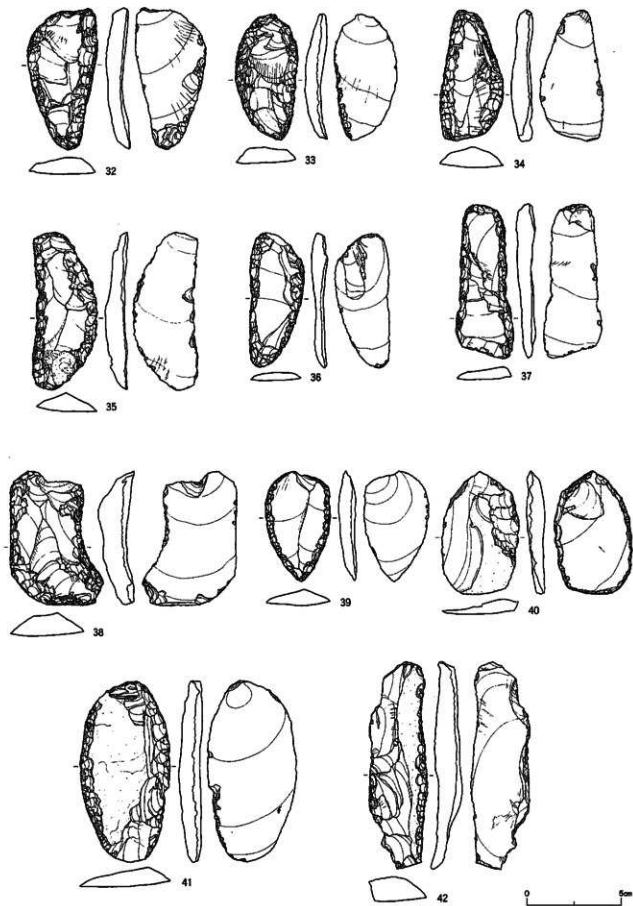


図25 包含層出土の石器 (4)

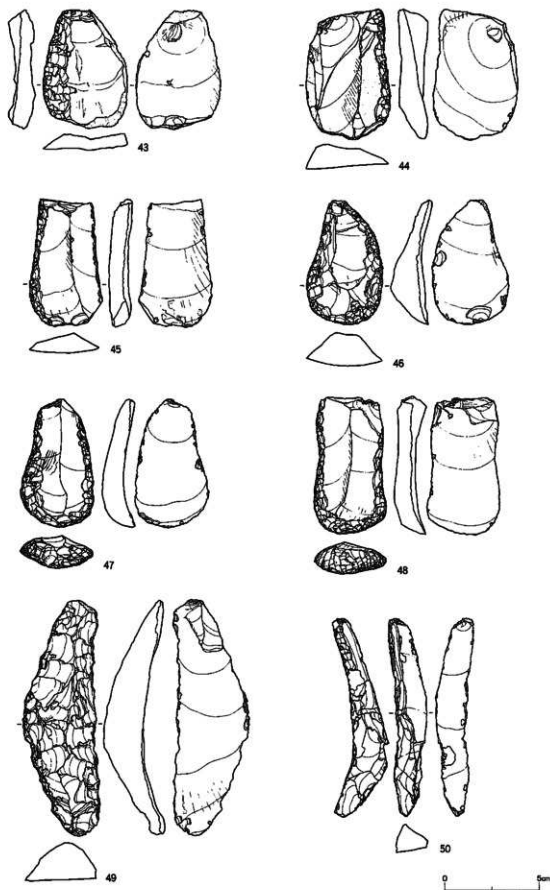


図26 包含層出土の石器 (5)

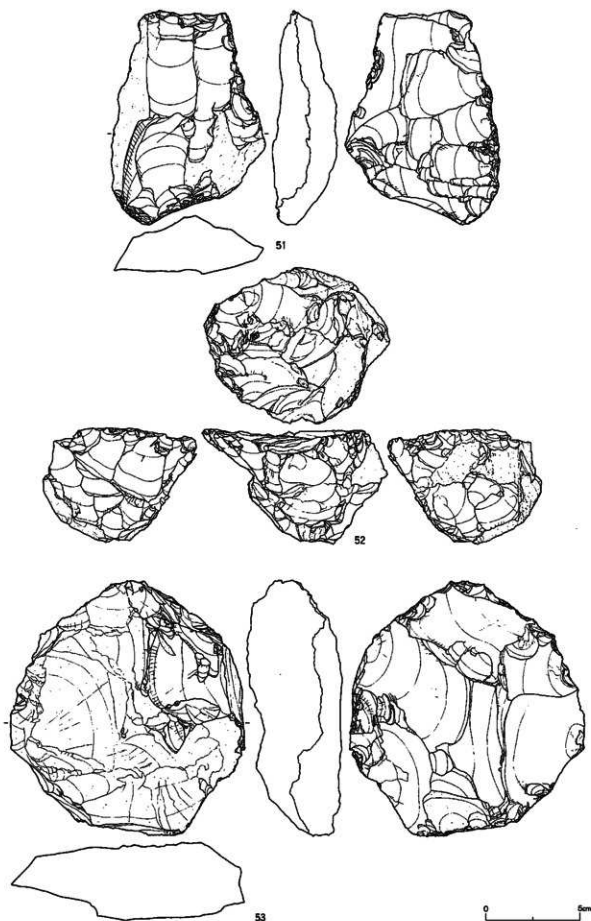


図27 包含層出土の石器(6)

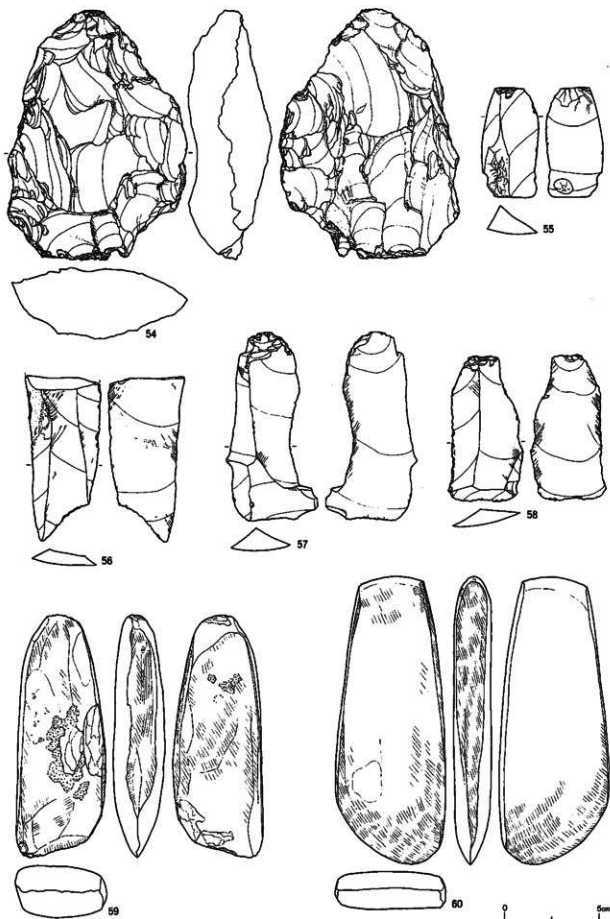


図28 包含層出土の石器 (7)

IV 包含層出土の遺物

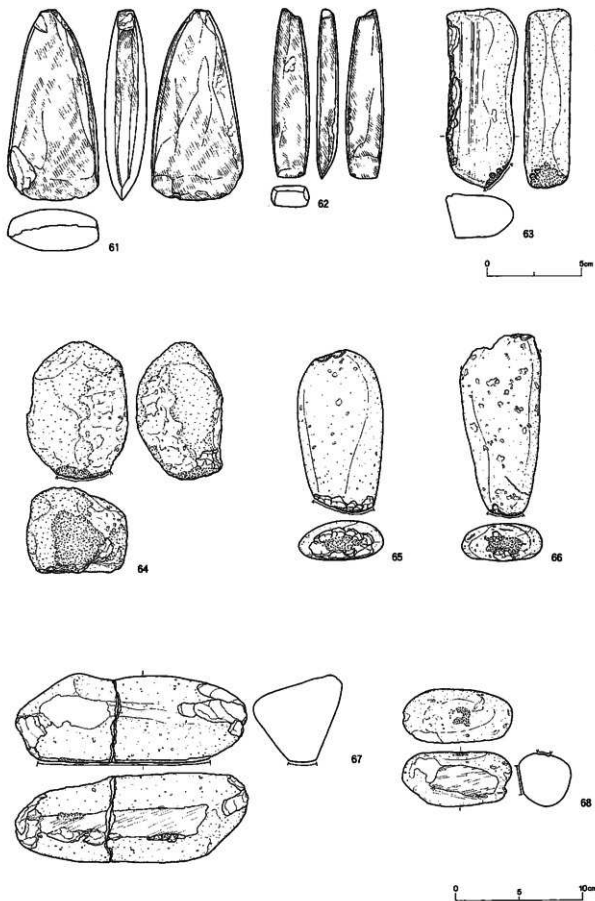
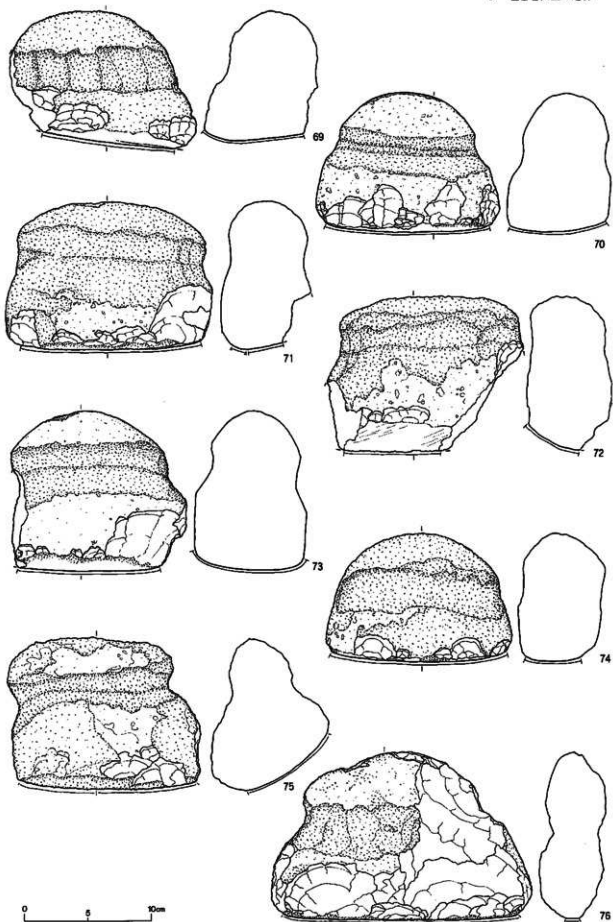


図29 包含層出土の石器 (8)



0 5 10cm

図30 包含層出土の石器 (9)

IV 包含層出土の遺物

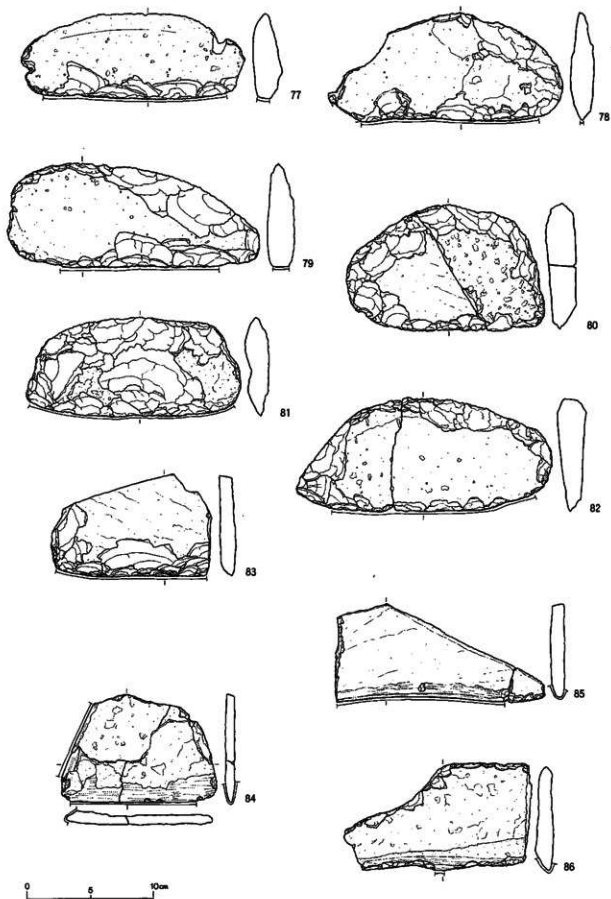


図31 包含層出土の石器 (10)

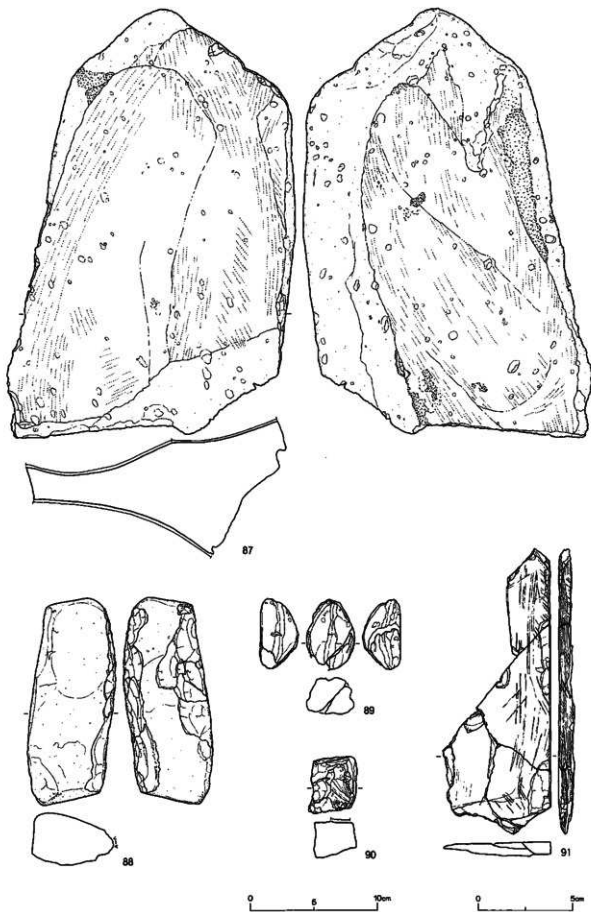


図32 包含層出土の石器 (11)

Ⅳ 包含層出土の遺物

石皿・合石 (87)

30点出土している。87は安山岩製である。両面が使用され、作業面は明瞭にくぼんでいる。

加工痕のある礫 (88)

26点出土している。88は縦長の礫の稜線を打ち欠いたものである。石斧の原材の可能性もある。

礫石 (89・90)

50点出土している。89は軽石製、90は砂岩製である。

石製品 (91)

10点出土している。うち8点は91の同一個体である。91は千枚岩製で、研磨によって直角の稜線が作られている。表面には明瞭な擦痕が残っている。他、黒曜石製の異形石器とみられる被熱した破片が出土している。

(立田 理)

表11 包含層出土掲載石器一覧(1)

番号	発掘区	遺物番号	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	備考
1	K-10	26	IV	石鏃	黒曜石	(2.5)	1.7	0.4	1.6	12	
2	N-8	1	I	石鏃	頁岩	3.1	1.6	0.4	2.1	12	
3	O-10	8	I	石鏃	頁岩	4.3	1.5	0.5	3.3	12	
4	M-9	10	I	石鏃	頁岩	3.9	1.6	0.4	2.8	12	
5	L-20	1	I	石鏃	頁岩	3.1	1.2	0.3	0.8	12	
6	M-12	1	I	石鏃	頁岩	3.8	1.0	0.2	0.7	12	
7	M-20	3	I	石鏃	頁岩	4.2	1.2	0.2	1.3	12	
8	Q-11	12	I	石鏃	頁岩	2.5	1.2	0.3	0.7	12	
9	J-15	9	IV風倒	石槍・ナイフ	頁岩	7.5	2.5	0.8	12.5	12	
10	L-17	6	IV風倒	石槍・ナイフ	頁岩	6.8	2.4	1.0	13.3	12	
11	L-9	8	I	石槍・ナイフ	頁岩	8.6	2.3	1.1	22.2	12	
12	K-10	65	III風倒	石槍・ナイフ	頁岩	(9.3)	2.3	0.8	17.3	12	
13	K-10	1	I	石槍・ナイフ	頁岩	(6.7)	4.2	1.0	29.1	12	
14	O-8	12	III	石槍・ナイフ	頁岩	12.6	3.5	1.5	64.1	12	
15	L-9	17	IV風倒	石鏃	頁岩	3.6	1.5	0.6	3.2	12	
16	K-8	39	IV風倒	石鏃	頁岩	4.2	1.6	0.7	4.5	12	
17	K-17	11	IV風倒	石鏃	頁岩	3.7	1.8	0.9	4.8	12	
18	J-14	1	I	つまみ付きナイフ	頁岩	8.2	2.4	0.5	12.2	13	
19	O-8	34	III撥乱	つまみ付きナイフ	頁岩	8.0	2.5	0.8	13.8	13	
20	P-4	1	I	つまみ付きナイフ	頁岩	6.9	1.5	0.6	8.4	13	
21	M-7	22	III風倒	つまみ付きナイフ	頁岩	(7.8)	2.2	1.0	19.5	13	
22	K-6	21	IV	つまみ付きナイフ	頁岩	5.8	2.4	0.6	9.4	13	
23	Q-4	14	風倒	つまみ付きナイフ	頁岩	7.5	1.9	0.5	9.7	13	
24	M-24	50	III	つまみ付きナイフ	頁岩	(11.3)	3.4	1.1	34.9	13	
25	L-14	1	I	つまみ付きナイフ	頁岩	12.5	3.1	0.9	48.1	13	
26	L-5	1	I	鉋状石器	頁岩	5.2	3.1	0.9	22.4	13	
27	K-6	32	IV	両面調整石器	頁岩	8.2	5.8	1.7	70.9	13	
28	L-18	14	III風倒	両面調整石器	頁岩	13.8	4.7	2.4	146.4	13	
29	N-10	10	III	両面調整石器	頁岩	11.7	3.8	1.6	86.4	13	
30	N-20	3	I	両面調整石器	頁岩	10.1	6.1	1.5	113.6	13	
31	O-7	4	I	両面調整石器	頁岩	10.3	6.4	2.2	141.0	13	
32	Q-11	16	I	スクレイパー	頁岩	7.5	3.5	1.0	27.6	14	
33	P-7	41	III風倒	スクレイパー	頁岩	6.6	3.1	0.8	23.0	14	
34	M-25	4	I	スクレイパー	頁岩	6.9	3.4	1.0	25.8	14	
35	L-17	10	III風倒	スクレイパー	頁岩	8.2	3.2	0.9	27.6	14	
36	O-4	10	IV	スクレイパー	頁岩	7.0	2.6	0.4	14.7	14	
37	N-21	6	I	スクレイパー	頁岩	8.1	2.9	0.6	19.4	14	
38	O-22	9	I	スクレイパー	頁岩	17.0	3.9	1.2	47.7	14	
39	N-21	15	III風倒	スクレイパー	頁岩	5.7	3.9	0.8	16.0	14	
40	L-22	12	III風倒	スクレイパー	頁岩	6.5	4.0	0.8	21.0	14	
41	N-4	3	I	スクレイパー	頁岩	9.5	4.8	0.9	49.0	14	
42	O-20	11	IV	スクレイパー	頁岩	10.9	3.0	1.3	44.9	14	
43	L-16	18	III風倒	スクレイパー	頁岩	6.2	4.4	0.7	31.7	14	
44	K-11	24	III	スクレイパー	頁岩	6.8	4.4	1.3	42.3	14	
45	K-13	1	I	スクレイパー	頁岩	6.7	3.7	1.1	29.8	14	
46	M-11	11	I	スクレイパー	頁岩	6.5	4.0	1.7	38.1	14	
47	M-24	6	IV	スクレイパー	頁岩	6.7	3.8	1.7	29.5	14	
48	M-24	5	IV	スクレイパー	頁岩	7.2	3.8	1.7	38.7	15	
49	J-13	5	III風倒	スクレイパー	頁岩	12.4	3.8	2.0	83.3	15	

IV 包含層出土の遺物

表12 包含層出土掲載石器一覧(2)

番号	発掘区	遺物番号	層位	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	備 考
50	O-11	8	I	スクレイパー	頁 岩	10.5	1.6	1.5	26.5	15	
51	P-5	20	IV	Rフレイク	頁 岩	11.3	7.9	3.0	261.4	15	
52	M-12	9	I	石 核	頁 岩	9.8	8.2	6.0	402.0	15	
53	O-9	10	III風倒	石 核	頁 岩	13.4	12.3	4.1	719.3	15	
54	K-10	11	I	石 核	頁 岩	13.1	9.2	3.7	471.5	15	
55	N-21	16	III風倒	フレイク	頁 岩	5.8	3.0	1.6	26.1	15	
56	Q-7	1	I	フレイク	頁 岩 (8.8)	4.0	0.9	26.7	15		
57	K-6	49	IV	フレイク	頁 岩	9.9	4.8	1.3	41.4	15	
58	O-4	12	IV	フレイク	頁 岩	7.6	3.8	0.9	23.7	15	
59	O-6	21	IV	石 斧	片岩?	12.8	4.7	2.7	281.8	16	
60	O-8	18	III風倒	石 斧	緑色泥岩	15.1	5.8	2.0	324.7	16	
61	Q-11	30	III風倒	石 斧	緑色泥岩	10.0	4.8	2.2	153.5	16	
62	M-24	31	V風倒	石のみ	緑色泥岩	8.9	2.0	1.1	36.2	16	
63	P-15	4	I	たたき石	泥 岩	15.0	5.3	3.5	542.3	16	
64	L-26	12	IV風倒	たたき石	流紋岩	10.7	7.9	6.7	669.6	16	
65	K-17	16	III風倒	たたき石	安山岩	12.8	6.7	3.1	400.1	16	
66	P-2	2	I	たたき石	安山岩	14.2	6.3	2.9	375.9	16	
67	L-8 O-6	3 3	I I	すり石	安山岩	18.2	6.8	6.9	1087.2	16	L-8, O-6 接合
68	L-13	3	I	すり石	流紋岩	8.6	4.1	4.0	197.4	16	
69	J-12	1	I	北海道式石冠	閃緑岩 (14.7)	10.2	9.0	1630.0	17		
70	K-9	36	IV風倒	北海道式石冠	安山岩	14.4	10.8	8.2	1620.0	17	
71	O-3	16	III風倒	北海道式石冠	安山岩	16.2	11.6	(7.1)	1880.0	17	
72	K-10	39	III	北海道式石冠	安山岩 (15.4)	12.0	6.7	1650.0	17		
73	M-23	10	I	北海道式石冠	安山岩 (13.7)	12.4	8.8	2200.0	17		
74	N-22	24	IV風倒	北海道式石冠	安山岩	14.6	10.0	6.9	1210.0	17	
75	P-9	18	IV風倒	北海道式石冠	安山岩	15.2	11.9	9.2	1870.0	17	
76	K-9	4	I	北海道式石冠	凝灰岩	20.5	13.1	5.3	1490.0	17	
77	M-24	17	I	偏平打製石器	安山岩	17.7	6.6	2.3	290.9	18	
78	M-16	25	風倒	偏平打製石器	安山岩	18.4	8.3	1.9	291.0	18	
79	M-24	16	I	偏平打製石器	安山岩	19.8	8.0	2.1	493.6	18	
80	O-6 O-7	2 5	I I	偏平打製石器	安山岩	15.5	9.7	2.4	480.6	18	O-6, O-7 接合
81	M-6	24	IV	偏平打製石器	安山岩	16.9	7.7	1.9	349.4	18	
82	K-15 M-18	2 4	I I	偏平打製石器	安山岩	20.1	8.8	2.3	501.8	18	K-15, M-18接合
83	L-8	39	III風倒	偏平打製石器	安山岩	14.6	7.8	1.3	224.2	18	
84	Q-11 Q-11	2 13	I I	石 鏃	安山岩	12.2	8.5	1.2	28.7	18	Q-11-2・13接合
85	P-9	16	IV風倒	石 鏃	砂岩?	16.5	7.3	1.1	182.6	18	
86	P-9	7	IV風倒	石 鏃	安山岩	14.7	8.1	1.5	242.1	18	
87	M-18	10	IV	石 皿	安山岩	33.2	20.4	10.3	5860.0	19	
88	O-7	35	III風倒	加工痕のある鏃	片 岩	17.2	6.4	4.1	742.4	19	
89	K-19	5	III風倒	砥 石	軽 石	5.5	3.7	2.8	14.0	19	
90	K-13	2	I	砥石片	砂 岩	4.4	3.3	2.8	55.8	19	
91	O-20	16	IV	石製品	千枚岩	15.0	5.6	0.7	60.6	19	

V 自然科学的分析

1 豊野6遺跡の火山灰について

本遺跡では、作土層の直下に降下火山灰層が認められた。この火山灰について記載し、既知の火山灰との対比を行なう。この火山灰は耕作により削割されていることが多く、比較的保存の良い地点(杭M-24付近、図33)から試料を採取した。この地点での土層は上位から下位へ以下のとおりである。
[]内の層名は基本土層に対応する。

- ① 作土、層厚15cm。[I層]
- ② 降下火山灰、二つのフォールユニットから成る。[II層]
上部：にぶい橙色(7.5YR 6/4)、シルト質、層厚3cm。
下部：褐色(10YR 4/4)、砂質、層厚1.5cm。
- ③ 暗赤褐色(5YR 3/2)砂質腐植土、層厚1.5cm。
- ④ 褐灰色(7.5YR 6/1)粘土、層厚3~6cm。
- ⑤ にぶい褐色(7.5YR 5/4)粘土、層厚3~6cm。
- ⑥ 黒色(5YR 1.7/1)粘土質腐植土、層厚15cm。
- ⑦ 明褐色(7.5YR 5/6)ローム、層厚10cm<。[V層]

火山灰の上部と下部から採取した試料は、超音波洗浄後、篩い分けし、ベトロボキシ154で封入したプレパラートを作成して偏光顕微鏡で検鏡した。

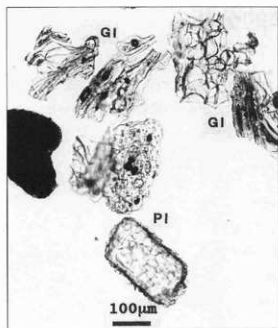
結果：検鏡結果を表13に示す。下部は重鉱物が少なく、斜長石が頗る多い。上部では重鉱物は少なく、斜長石に加え火山ガラスが多い。結晶粒は新鮮で、半自形~自形である。火山ガラスに被覆される結晶粒も多い。火山ガラスの形態は、泡壁がつくる模様が網目様を呈する軽石型である(写真2)。気泡径は0.01~0.05mmで、0.02mmくらいのものが多い。

対比：現在の表土直下で、上記の鉱物組み合わせと火山ガラスの形態を有する火山灰は、駒ヶ岳起源のKo-d (A. D. 1640、町田・新井、1992、佐々木ほか、1970)と考えられる。Ko-dは渡島半島の全域に分布し、長万部付近は地層として明瞭に認められる北限であろう。

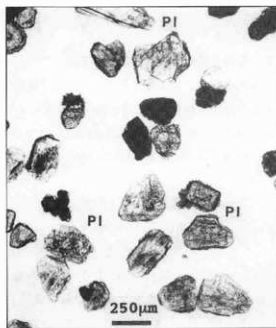
引用文献

- 町田 洋・新井房夫(1992)：「火山灰アトラス」。東京大学出版会、276pp。
佐々木竜男・片山雅弘・音羽道三・天野洋司(1970)：渡島半島の火山灰について。北海道農試土性調査報告、20、pp.255-281。

(花岡正光・鎌田 望)



上部



下部

写真2 火山灰の顕微鏡写真（下方ポーラーのみ）

PI：斜長石 GI：火山ガラス

表13 火山灰の鉱物組成

試料	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	不透明鉱物	火山ガラス
上部	多い	少ない	まれ	少ない	多い
下部	頗る多い	少ない	まれ	少ない	まれ

粒径1/4-1/8mm

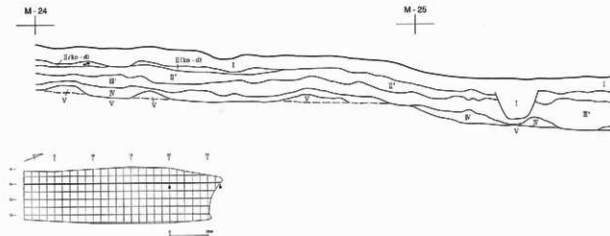
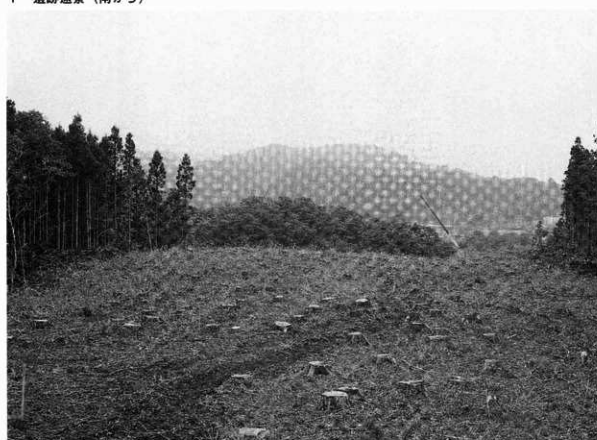


図33 試料採取位置



1 遺跡遠景（南から）



2 調査前状況（南西から）

写真図版1 豊野6遺跡遠景・調査前の状況



1 調査終了後の調査区（南西から）



2 25%調査状況（南西から）

写真図版2 調査終了後の状況・25%調査状況



1 メインセクション1 (南から)



2 M-24付近土層断面 (南西から)



3 メインセクション1 (M-23~26) (北東から)

写真図版3 メインセクション1

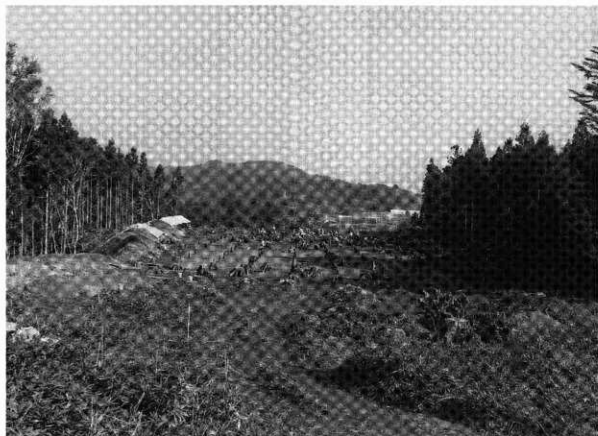


1 メインセクション2 (東から)



2 メインセクション2 (O-13~M-13) (南東から)

写真図版4 メインセクション2

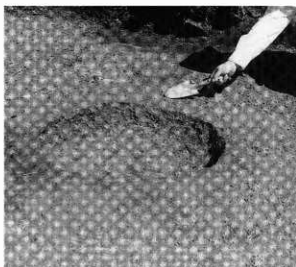


1 調査風景（南から）

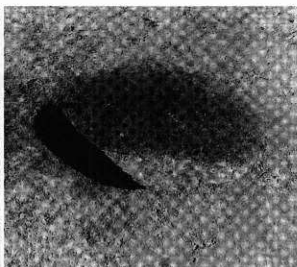


2 調査風景（西から）

写真図版 5 包含層調査状況



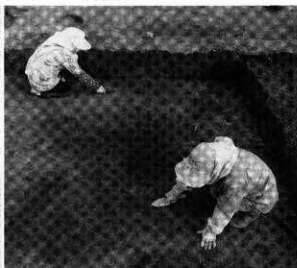
1 P-1 全景 (南から)



2 P-1 土層断面



3 F-1 検出状況 (南から)



4 F-2, 3 検出状況 (北西から)

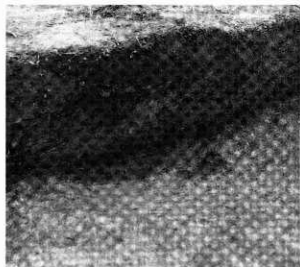


5 F-2 検出状況



6 F-3 検出状況

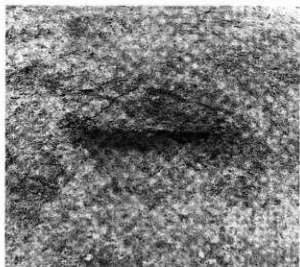
写真図版 6 遺構 (1)



1 F-3 土層断面 (西から)



2 F-4 検出状況 (北東から)



3 F-4 土層断面 (南東から)



4 F-5 検出状況 (南東から)



5 F-6 検出状況



6 F-6 土層断面 (南から)



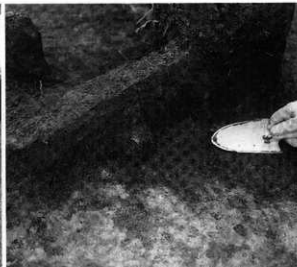
1 M-13区遺物出土状況（北西から）



2 左の拡大（東から）



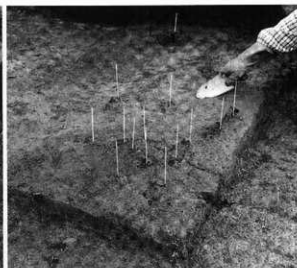
3 J-15-b区遺物出土状況



4 L-5-d区遺物出土状況（東から）

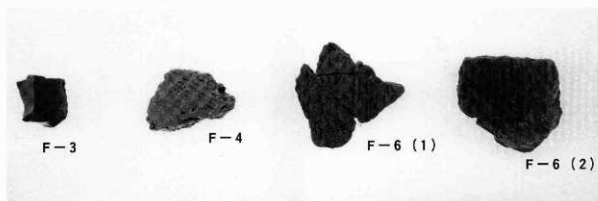


5 M-5-C区遺物出土状況（西から）



6 O-5-b区遺物出土状況（西から）

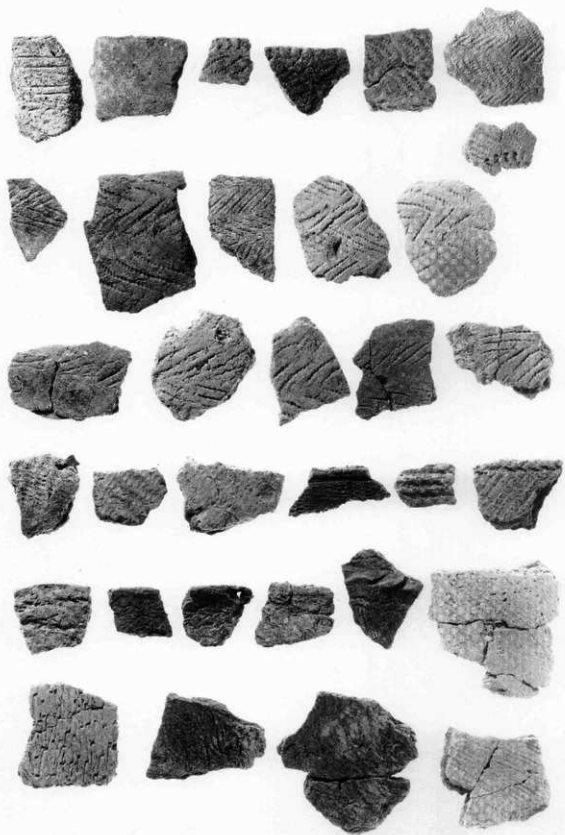
写真図版 8 包含層遺物出土状況



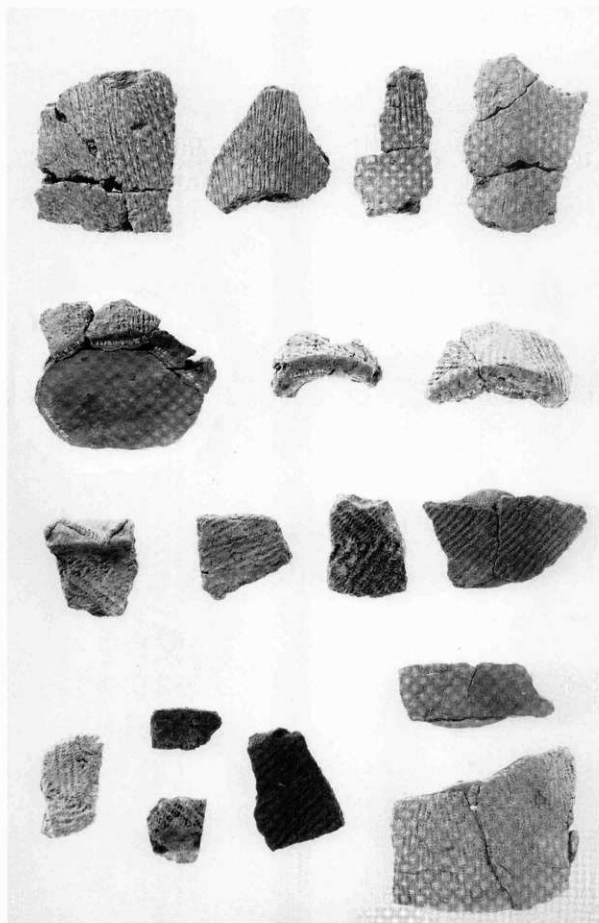
1 遺構出土の土器



2 包含層出土の土器 (1)



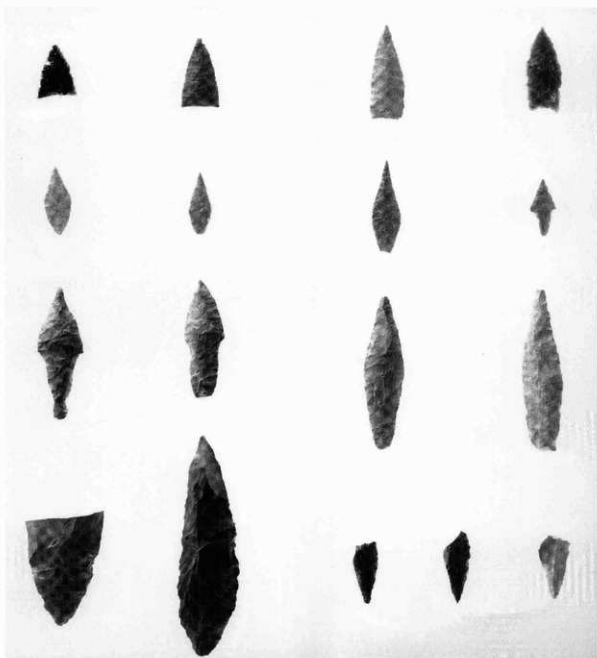
写真図版10 包含層出土の土器（2）



写真図版11 包含層出土の土器（3）

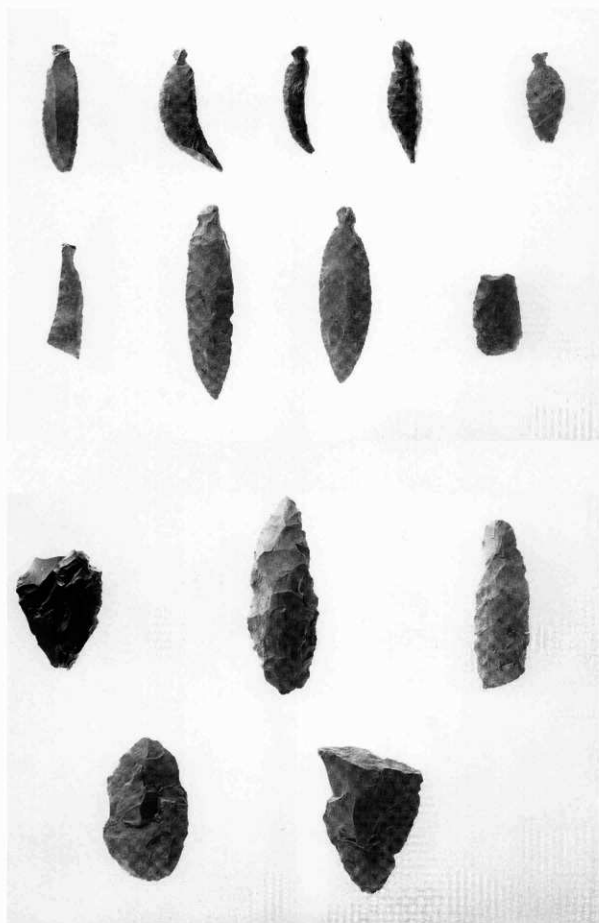


1 類焼成粘土塊

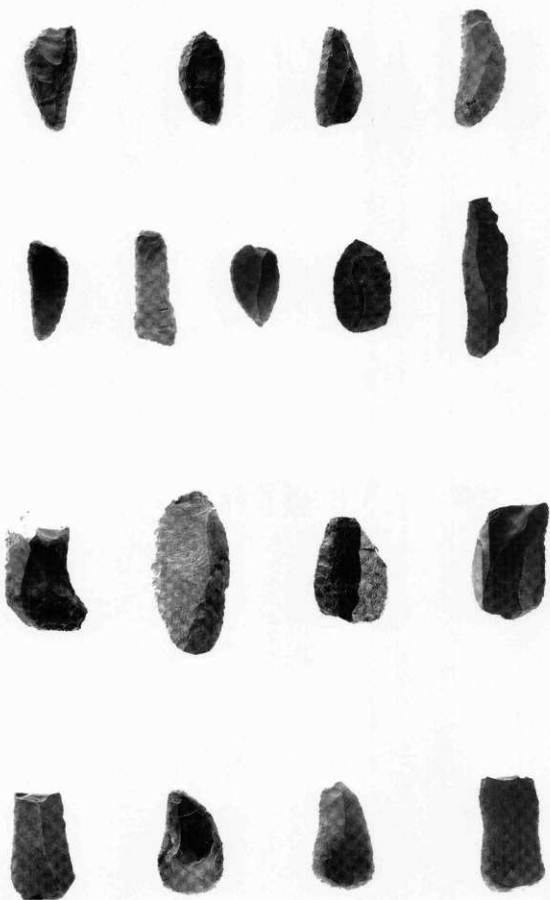


2 包含層出土の石器 (1)

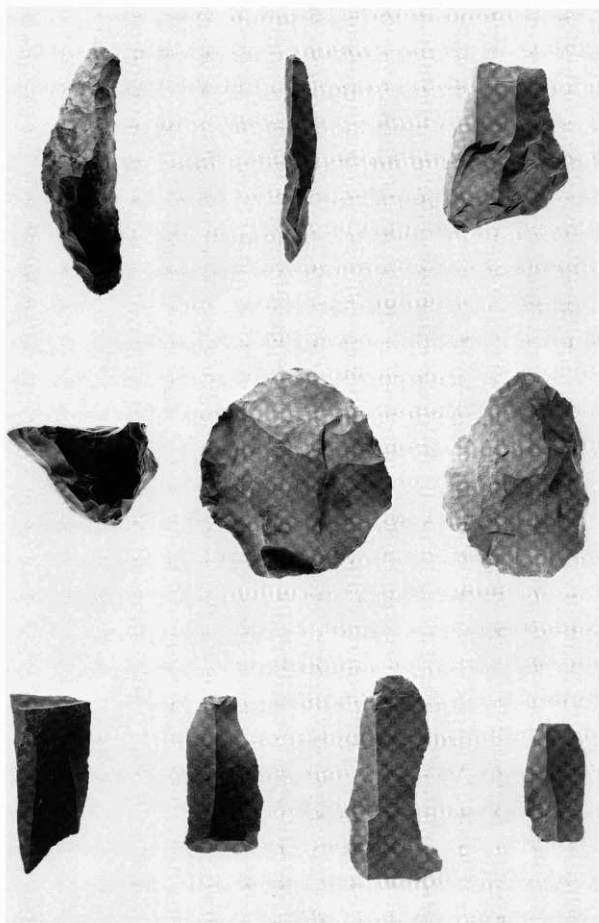
写真図版12 類焼粘土塊・包含層出土の石器 (1)



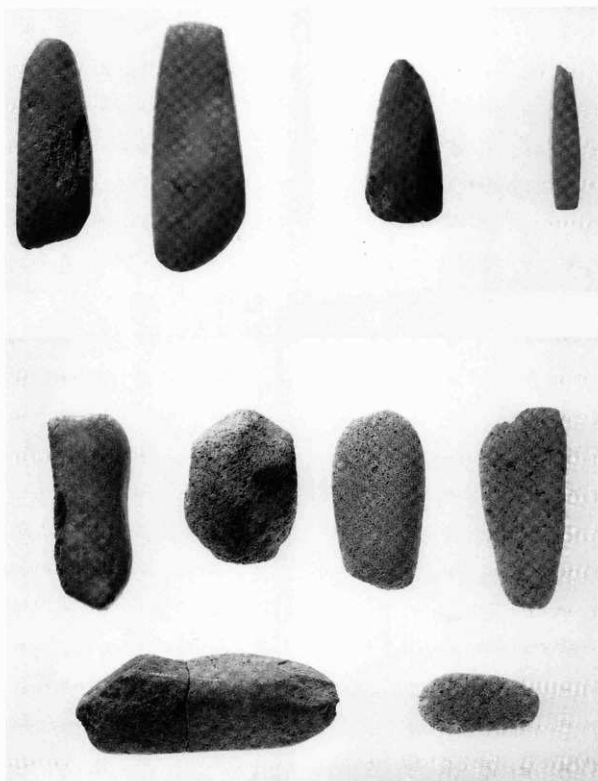
写真図版13 包含層出土の石器（2）



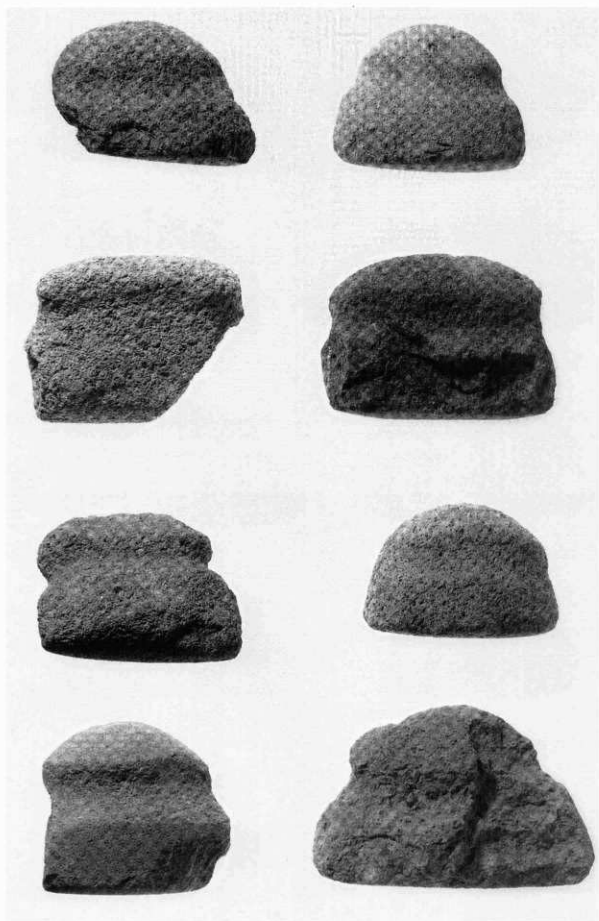
写真図版14 包含層出土の石器(3)



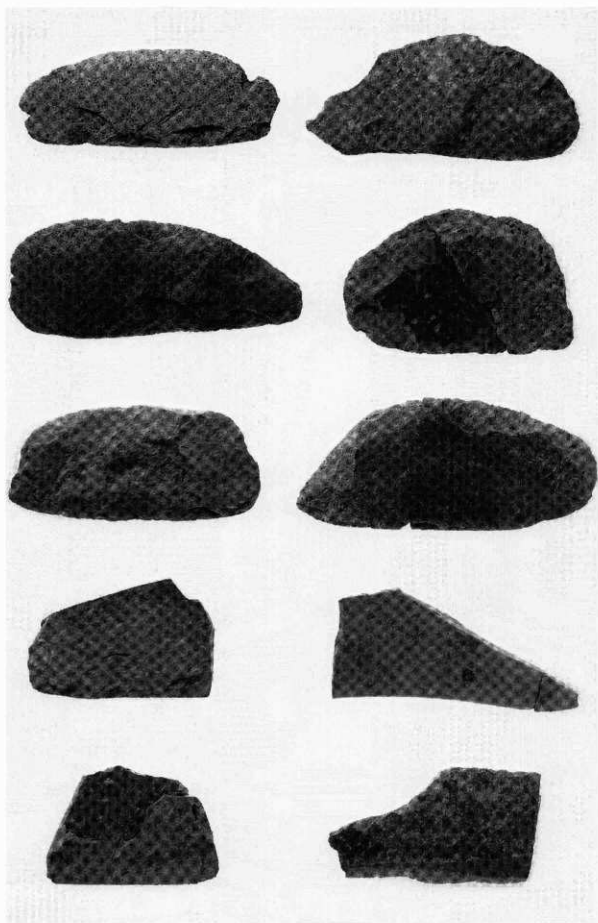
写真図版15 包含層出土の石器（4）



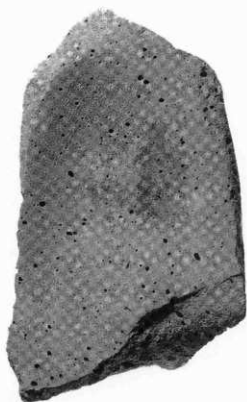
写真図版16 包含層出土の石器 (5)



写真図版17 包含層出土の石器（6）



写真図版18 包含層出土の石器（7）



写真図版19 包含層出土の石器（8）

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1975 『中の平遺跡発掘調査報告書』(青森県埋蔵文化財調査報告書第25集)
- 江坂輝彌編 1970 『石神遺跡—円筒土器文化の編年的研究—』青森県森田村教育委員会
- 大場利夫・田川賢蔵 1955 『静養遺跡』長万部町
- 大沼忠春 1984 『道南の縄文前期土器群の編年について』
『北海道考古学』第20輯 pp.105-112
- 1986 『道南の縄文前期土器群の編年について(Ⅱ)』
『北海道考古学』第22輯 pp.153-159
- 長万部町史編集室 1977 『長万部町史』
- 長万部町教育委員会 1995 『オハルベツ2遺跡・栄原2遺跡・ナイベコシナイ2遺跡
—平成6年度 縦貫自動車道長万部町埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』
- 1996 『オハルベツ2遺跡・栄原2遺跡
—平成7年度 長万部町埋蔵文化財発掘調査概要図版集—』
- 1996 『ナイベコシナイ2遺跡』(長万部町埋蔵文化財調査報告)
- 1997 『栄原2遺跡 Ⅰ』(長万部町埋蔵文化財調査報告第2集)
- 1997 『オハルベツ2遺跡・栄原2遺跡—長万部町埋蔵文化財発掘調査概要図版集—』
- 1998 『オハルベツ2遺跡—平成9年度 長万部町埋蔵文化財発掘調査概要図版集—』
- 1999 『オハルベツ3遺跡 オハルベツ4遺跡』(長万部町埋蔵文化財調査報告第3集)
- 乙部町教育委員会 1977 『栄浜遺跡』
- 木古内町教育委員会 1996 『釜谷遺跡概要報告書V』
- 児玉作左衛門・大場利夫・武内収太 1958 『サイバ沢遺跡』市立函館博物館
- 二本柳正一・角鹿順三・佐藤道男 1957 『青森県上北部早稲田貝塚』『考古学雑誌』第43巻第2号 pp.35-58
- 瀬川秀良 1974 『日本地誌 北海道地方』朝倉書店
- 竹内理三編 1987 『角川日本地名大辞典』角川書店
- 永田方正 1984 『初版 北海道蝦夷語地名解 復刻版』草風館
- 長谷部晋人 1927 『円筒土器文化』『人類学雑誌』第42巻第1号 pp.28-41
- 八戸市教育委員会 1988 『赤御堂遺跡』(八戸市埋蔵文化財調査報告書第33集)
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1983 『北海道のチャシ』北海道文化財保護協会
- 北海道文化財保護協会 1999 『オハルベツ2遺跡』(北海道文化財保護協会報告書11)
- 1999 『富野5遺跡』(北海道文化財保護協会報告書12)
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1992 『中野A遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第79集)
- 1993 『函館市中野A遺跡Ⅱ』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第84集)
- 1994 『七飯町鳴川右岸遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第87集)
- 1996 『函館市西桔梗1遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第99集)
- 1996 『函館市石倉貝塚』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第109集)
- 1998 『函館市西桔梗1遺跡(2)』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第122集)
- 1999 『長万部町富野3遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第131集)
- 南茅部町教育委員会 1990 『ハマナス野遺跡 Ⅱ』
- 1991 『ハマナス野遺跡 Ⅲ』
- 1992 『ハマナス野遺跡 Ⅳ』
- 1995 『ハマナス野遺跡 Ⅴ』
- 南茅部町埋蔵文化財調査団 1992 『八木B遺跡』(南茅部町埋蔵文化財調査団第2 號報告)
- 三宅徹也 1974 『青森県における円筒下層式土器群の地域展開』
『北奥古代文化』第6号 pp.11-27
- 1981 『円筒土器』『縄文文化の研究 3 縄文土器Ⅰ』 pp.177-189 雄山閣
- 1989 『円筒土器下層模式』
- 1992 『縄文土器大観 1 草創期・早期・前期』 pp.312-314 小学館
- 村越 潔 1974 『円筒土器文化』雄山閣
- 八雲町教育委員会 1983 『栄浜』
- 1987 『栄浜1遺跡』
- 1991 『浜松2遺跡』
- 1992 『コタン温泉遺跡』
- 1995 『栄浜1遺跡』
- 1995 『浜松5遺跡』
- 1998 『栄浜1遺跡Ⅳ』
- 八雲高校郷土研究部 1952 『長万部町における恵山文化の土器』
- 山内清男 1929 『北関東に於る縄文土器』『史前学雑誌』第1巻第2号 pp.1-30

報告書抄録

ふりがな	おしまんべちょうとよのろくいせき							
書名	長万部町豊野6遺跡							
副書名	北海道縦貫自動車道(七飯~長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第143集							
編著者名	鎌田 望、立田 理、花岡正光							
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 TEL.011-386-3231							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
豊野6遺跡	北海道 山越郡 長万部町 字豊野127	01347	B-17-40	42° 25' 54"	140° 18' 51"	19990712~ 19991027	2,600	道路(縦貫自動車道)建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
豊野6遺跡	遺物包含地	縄文時代前期	土塹 1基 焼土 6ヵ所	縄文土器 (貝殻文土器、東鋼路Ⅲ式、東鋼路Ⅳ式、春日町式、円筒土器下層式、円筒土器上層式) 石器 (石鏃、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、偏平打製石器、石錐、たたき石、北海道式石冠、台石、石皿、砥石、石核)		なし		

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第143集

長万部町

豊野6遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成12年3月31日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1
TEL(011) 386-3231 FAX(011) 386-3238

印刷 三浦印刷株式会社
〒064-0802 札幌市中央区南9条西6丁目
TEL(011) 511-6191 FAX(011) 512-6041